

---

# 『竜皇帝の花嫁』

しーぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『竜皇帝の花嫁』

### 【Zコード】

N1573W

### 【作者名】

しーふ

### 【あらすじ】

中華風ファンタジー。完結済み。たまに分岐があります。好きな方を選んで進んでみてください。

竜と天女を祖に持つ竜天国。天領の姫、鈴花は皇帝の息子、竜蒼と婚約していたのだが……。

## 天女の庭

竜宮には一年中花が咲いている。

この地に眠る竜天国の始祖が妻と子孫を思つて咲かせているのか、あるいは眠る夫を見守る天女の力なのか　この場所から花が消えたことはない。

むせ返るような香りの中、鈴花は歩いていた。

今年で七歳になる天領の姫は、しゃらしゃらと簪を揺らして辺りを見回す。

探しものだ。

蓮華草。ピンク色の丸い花が自分の名前の鈴を思わせるので好きなのだ。

どの花も季節を無視して咲いているので、なかなかビビリにあるのかわからない。

春の花を囲むように夏の花が咲き、ひとつそりと秋の花が隠れている。

甘い香りの風に冬の花が揺れている。

どの花も美しいけれど鈴花は蓮華草でしか作れない。

くるくると歩き回つて、やつと見つけた。

鈴花は蓮華畠に座り込んだ。ピンクの裳裾がふわりと揺らんで、花に混じる。

茎を長めにとつて編み、花冠を作った。

ほかの花での作り方はまだ知らないのだ。

「竜蒼様に差し上げるのです」

満足してひとつじぢる。

幼い鈴花には、生まれて初めて会つた許婚にあげられるものはほかにない。

天領の姫としての力も目覚めていなかつた。それを思つと、少し胸が痛んだ。

年ごろになれば目覚めるものだと、みんなが言つ。

花を育て、ひとを癒す力。

いまその力があれば、救いを求めて竜宮に来るひとびとを助けてあげられる。

だれもが天領の姫と言つて鈴花を慕つてくれるのに、鈴花は彼らになにもしてあげられないでいた。まだ幼いのだからと父母に言われても胸の痛みは消せない。

花冠を腕にかけ、鈴花は祈つた。

「天女様、天女様。鈴花にお力をお与えください。姫として民を救いたいのです。そうして竜蒼様のお力になりたいのです」

いまはむかし。遠い遠いむかし、竜天国の大地は悪しき竜に蹂躪されていた。

大地の乱れは天をも乱す。

天帝に命を受けて地に降つた天女は、竜に尋ねた。

『どうして乱暴狼藉を働いているのです?』

竜は答えた。

『……ひとりは、寂しい』

竜には同族がいなかつた。

天女は竜の妻になり、ふたりは竜天国を築いた。

竜の死後、天女は天に戻つたが、いまもこの国を見守つていると

いう。

北部頭州は狸氏が治めているけれど、昇湖に浮かぶ、この竜宮だけは違つた。

竜宮のある島は天領と呼ばれ、皇帝の権力さえ及ばない。

ここは天女のための場所だつた。

彼女が天に戻つた場所で、彼女の力を受け継いだ娘が移り住んだ場所である。

最初の天領の姫、花元公主は類稀なる力を持ち、一代目の皇帝であつた弟を助け、大地に花を咲かせて民を飢えから守つたという。

以来天領の姫は不思議の力を受け継ぎ、花のついた名前を持つと決められていた。

皇家の分家である天領の姫は、何代かおきに当代に嫁ぐのが慣わしだった。

また、公主が天領に降嫁するのも珍しいことではない。

竜と天女の血を守るためだが、尊い血が濃すぎてゆがむこともないようなど、従兄妹より近しい間柄での婚姻は禁じられていた。

今上帝の長男、皇后が産んだ蒼皇太子と鈴花の血は遠い。

天領の家系は脈々と続いてきたけれど、皇家は政変によって何度も滅びかけた。

暗君だった先帝を反乱軍とともに打ち倒した今上帝は市井の生まれで、前に枝分かれして庶民に和した皇族の末裔だった。

祈り終えた鈴花は、蓮華を摘んだ辺りに手をかざした。風が蓮華畠を揺らし、ピンクの波を起こす。

だけどなにも起きない。

摘まれた蓮華は茎を晒したままで蘇りはしなかつた。

鈴花は、『くんと涙を飲み込んだ。

父母も家臣たちも、救いを求めてきたひとびとでさえ、鈴花が天領の姫の力を持たないことを責めない。彼らのことが好きだから、余計にその優しさが重かつた。

ふつと腕にかけた蓮華の花冠を思い出す。

「いけない！ 早く差し上げるのですわ」

自分の家とはいえ竜宮は広い。蓮華草を探して、ずい分と迷つた。竜宮の庭には花を楽しむための亭（東屋）がいくつも建てられている。

蒼皇子を待たせているのはどこだつただろうか。

池に浮かんだ水樹でなかつたことくらいしか覚えていない。

鈴花よりも背の高い花々をくぐり抜けて進んでいくと、なにかが聞こえてきた。

「ほあつ！」

鈴花の背筋に悪寒が走った。

すすり泣きだ。鬼（幽靈）だろうか。

いやそんなはずがない。ここは天女の土地だ。冥界から鬼が現れるはずがない。

けれど湖の昇は、天女が天に昇った場所という意味だけではなく、冥界に落ちた竜の魂が昇つてくるという意味もあるという。

天領の姫の中には、見鬼の力を持つていたものもいるという話だ。

「えつ、えつ、えつ……」

鬼にしてはあどけない声。

いやいや、子どもだつて死ねば鬼になるのだから安心は出来ない。

鈴花は花の陰から泣き声の主を覗いた。

そこは蒲公英の花畠。

黄色い花に混じつて揺れている、同じ色の頭。肌は褐色。正装である上衣下裳があまり似合っていない。

竜蒼と一緒に竜宮に来た皇帝の息子のひとりだ。

「……竜玄様？」

少年は、びくりと顔を起こした。

まだ五歳のはずだけれど、西域から帰順した虎家の血を引く彼には異民族の特徴が色濃く出ていて、ふたつ上の鈴花よりも大柄だった。涙に濡れた瞳が青い。

端整だが荒削りな容貌で、将来野性的な美丈夫に育つだろうと予感させていた。

「俺……俺、ごめんなさい……」

涙を拭う腕には刃で斬られた痕がある。

鈴花は顔をしかめた。

褐色の腕に血がこびりついている。あまりに痛そうでもらい泣きしてしまいそうだ。

「竜玄様、どうなさつたの？」

「碧兄上……碧皇子様が、黒い肌でも血の色は同じなのか見つけて

言つて……」

第一皇子竜碧の立場は微妙なものだった。

今上帝が市井にいたころからの恋人である鶯夫人を母に持つものの彼女はもういない。

庶民だった鶯夫人に後ろ盾はなく、彼自身の素行もあって支持するものは少ない。

年齢的にも第一皇子竜蒼より下だし、異母兄の母は名門獅家の娘で正式な皇后であるとすれば、万にひとつ勝ち目もないといわれていた。

帝位を主張する彼の一派が持つ根拠は、本当なら今上帝は即位したときに鶯夫人を皇后にしていたはず、というものだ。離縁させられるのを怖れた獅皇后に毒殺されたのだと訴えているのだが信憑性はない。

鶯夫人は今上帝の即位前ではなく、即位後に亡くなっているからだ。ただ獅家は毒の扱いに長ける一族として有名なため、その噂を信じているものも少なからず存在する。

鈴花は帯から薬を取り出した。

天領の姫の力には目覚めてないけれど、咲き乱れる百花から作られた薬の用法は教えられている。

「竜玄様、お手手を貸してくださいませ」

「…………うん…………」

一時期今上帝の寵愛を独占していた虎夫人もすでに亡くなっている。

こちらのほうは獅皇后の仕業に過ぎないと、だれもが思っていた。虎家は一族の血を引く竜玄を支持するとともに新しい虎夫人を後宮に送り込んでいる。

新しい虎夫人にとつての彼は、一族の宝で、なお且つ自分が身籠つたときは敵になるという一律相反の存在であった。

もつとも鈴花がそういった入り組んだ事情を知るようになるのは、まだ先のこと。

このときの鈴花にとつては、竜蒼はいつか結婚する許婚のひと、竜碧はなんとなく意地悪そうなひと、竜玄は体は大きいけれど年下だから守つてあげなくてはいけない子 そんなところだった。

ベタベタと傷薬を塗りたくり、鈴花は最後に髪を結っていた布をほどいて竜玄の腕に巻いた。淡雪のようにやわらかいうす紅の布に、少年は目を丸くした。

「ダ、ダメだよ。そんな綺麗なの」

彼は体の大きさだけでなく、精神的にも五歳を上回つていてだ。

味方と信じきれる相手がいない状況が、そうさせているのだろうか。

鈴花は首を傾げた。

「天領の姫は、ひとびとの傷を癒すためにいるのですわ」頭の角度が変わつたせいで、簪が抜ける。結つていた髪が解けたせいで、しつかり固定されなくなつていた。

「姫様！」

「え？」

気づいた竜玄は声を上げたが、まだ咄嗟に体が動くほどには成長していなかつた。

しゃらん。

七歳と五歳。鈴花と竜玄には大きく見える手が、地面に触れる前に簪を受け止めた。

「竜蒼様！」

振り返り、鈴花は頬を膨らませた。

自分が迷つていたことを棚に上げて、怒りを主張する。

「すぐに戻りますから、お待ちになつていてくださいと申し上げたでしょ？ 竜宮は広いのですから、初めての竜蒼様は迷子になつてしまりますわ！」

竜蒼は柔軟な顔に苦笑を浮べた。

絶世の美女と名高い獅皇后にうりふたつの彼は、凜々しい美男に

成長するだらうと噂されている。いまでも充分麗しい。幼い鈴花ですらひと目で好きになつたほどだ。

息子とともに竜宮を訪れた獅皇后の美しさにも感動した鈴花は、……いつかは鈴花も皇后様のようになるのだわ。

と、根拠のかけらもない希望を抱いている。

実際には皇家に次いで交わることの多い狸家の血が色濃く出ていて、鈴花は綺麗といつよりも可愛い顔の持ち主だつた。幼いせいもあるが、どことなく丸っこい。

「すぐですか。でも姫様？ もう花茶は冷めてしましましたよ？」出した花茶が冷める前に戻ると約束していたのである。

鈴花はうつむいて、うへと唸つた。気恥ずかしい。

竜蒼は優しく鈴花の頭を撫でたあと、簪を戻してくれた。

「意地悪を言つてごめんなさい。お会いしたくて約束を破つたのは私のほうですね」

鈴花は首を横に振つた。

竜蒼を好きになつたのは、麗しいだけでなく優しいからだ。

亭で話をしていたときも熱いお茶を冷ましてくれたし、お菓子も

わけてくれた。

翔都の芳士宮に戻つたら、今日の記念に装身具を届けさせるとも言つてくれた。

だからなにか贈りたくなつたのだ。

「竜蒼様、ごめんなさい。鈴花は遅くなりました。これを差し上げたかったのです」

腕に通して持ち歩いていた花冠を差し出すと、竜蒼は微笑んで受け取つてくれた。

子どもが作った出来の悪いクシャクシャの花冠を頭に載せる。

「ありがとうございます、姫様。……玄」

竜玄の青い瞳から、ぽろぽろと涙が流れ落ちた。

長兄の姿に安堵したのだらう。鈴花もホッとしてもうい泣きをこぼした。

「兄上……蒼兄上……」

竜蒼は形の良い眉をひそめた。

「また碧だね、可哀相に。直接注意すると、あとでお前が苛められるから、私がこいつそり意地悪をしておいてあげる」

そう言つて、竜蒼はニヤリと悪い笑みを浮かべた。

「さあ、それじゃあ三人で亭に戻つてお菓子でも食べましょうか」

鈴花は竜蒼が差し出す手を握つた。

それから気づいて、竜玄に手を差し出す。

彼はおどおどと怯えながら、けれどしつかりと握り返してきた。

「そうしましよう!」

鈴花が言つと、竜蒼が微笑んだ。

竜玄も笑う。

三人は花の道を歩き出した。

あれから、十一年。

鈴花は北部頭州から、翔都のある右州へと落河を下つていた。船の縁から水面を見ると、一輪の花が海へと流されていく。

竜宮から流れてきたのだろうか。

いや、昇湖は落河とつながつていない。鈴花だつて頭州の港までは輿で進んだ。風が運ぶ時期でもない。季節外れなのは花の開花だけで、天領だつて空や風は外と変わらない。

振り返れば落河の源流があるという護山脈がそびえたつている。もしかしたらそこから流れてきたのだろうか。

護山脈は遠い。頭州に属していることになつてはいるが、人里離れた北の彼方だ。

花は自分がどこに流されていくのかなど考えたこともなかつたに違ひない。

鈴花だつて想像もしていなかつた。

自分が許婚の竜蒼のもとにではなく、彼の父親である今上帝、竜青の後宮に入ることになるなどとは。

船倉に置いてある荷物には、この十一二年間に竜蒼にもらつた竹簡も装身具も入れてはいない。彼が竜宮に来たのは、あのときの一度だけだつたけれど、芳土宮に戻つて約束の品を送つてくれたあとも、折につけ手紙や贈り物を届けてくれていた。

とはいえほかの男からの贈りものなど必要ないくらい、皇帝がすべての準備をしてくれていたし、鈴花も持つていく気にはなれなかつた。

見ればかならず思い出してしまう。

幼い少女が精いっぱいに、年上の許婚を想つていた気持ちを。

……竜蒼様。

流れる花は自分の行く末を知らない。

……わたしは、鈴花はどこに行つてしまふのでしょうか?

鈴花はいまだ天領の姫としての力に目覚めていない。

だからだれかが竜蒼には相応しくないとthoughtのだろう。

そのだれかはきっと、天から見守つてくれている始祖なる天女に違ひない。

踊るように水面で回つていた花は、いつか涙で滲んで見えなくなつた。

天女の庭（後書き）

＜『竜皇帝の庭』につづく＞

竜天国右州落河に映るのは翔都、竜皇帝住まう芳土宮。広大な芳土宮の一部でありながら後宮は、それ自体がひとつの中のようだった。

下級后妃は集団住宅で生活し、皇帝に呼び出されるものだが、鈴花のような上級后妃には一軒家が与えられ、皇帝のほうから訪れる。今上帝竜青には獅晶波という皇后がいたため、鈴花は夫人の地位に置かれた。

皇后に次ぐ地位と権力を持つものの、同じ位のものがふたりいる。そもそも天領の姫が皇后以外の地位で後宮に入るには、竜天国が建国されて以来始めてのことだった。

鈴花に与えられた家は、いつそ宮殿といつても良いほど豪奢なものだった。

実際小さな州を治める君主の館よりも大きいに違いない。室内は、彫刻され彩色された木工細工できらびやかに飾られている。部屋の隅に置かれた青磁の壺が彩りを引き締め、派手で軽薄になりがちな雰囲気を調和していた。

窓から吹き込む風が、あちこちに飾られた花の香りで部屋を満たす。

それは鼻をくすぐるだけで、けして支配はしない。

確かめようとすれば消えてしまふ、心地良い儂さを保っていた。

花に覆われた竜宮から来た鈴花を気遣つてくれたのだろう。

耳を澄ませば芳土宮の敷地を流れる人工河のせせらぎが聞こえた。

「天夫人」

厳密にいえば、鈴花に姓はない。

天領の姫は天女の化身。地上の人間の血には縛られない。しかし慣例として、後宮に入る際には天の姓を名乗ることとなっていた。

鈴花を呼んだのは仮面をかぶった男だつた。

彼の字は幽海、姓名は宦官になつたとき捨てたのだといつ。

天夫人の護衛であり世話役でもある。仮面でぐぐもつた声は、どこか聞き覚えがあるような気がした。そもそもどうして仮面をかぶつているのだろうか。後宮にいるほかの宦官は素顔を晒していた。

「なんですか？」

「獅皇后陛下からお誘いです。羽律苑にお越しくださいとのことです」

鈴花は目を丸くした。

「どうなさいます？ 輿を「」用意いたしましたようか？」

本当なら母と呼んでいたはずのひとが、いまは同じ男性の寵愛を争う相手になつた。

複雑な思いを飲み込んで、鈴花は幽海にうなずいた。

輿で運ばれ、羽律苑に着く。

後宮内にある広大な庭園は、百一十人を前後する上級下級の后妃たちの無聊を慰めるため、さまざまな施設を内包している。動物園、植物園、音楽や演劇を楽しむ舞台、いささか品はないが競馬や鬪鷄なども楽しめた。

芳土宮を流れる人工河から水を引いた池もあり、船遊びも可能だ。季節の式典の折などには一般に開放することもあるという。

后妃たちに仕える召使いたちも散策を楽しめる場所のはずなのに、辺りには護衛の宦官以外の姿はなかつた。

鈴花は空を見上げる。

やわらかな春の空。風が優しく髪を撫でていく。  
羽律苑の木々も競うように花をつけている。

後宮の仕事は基本午前中だけだ。いまは午後。せっかくの天気なのだから、花を見たいと思うものはいなかつたのだろうか。  
いや、いたに違いない。

だれもいないのは、彼女がそう望んだからだ。

獅皇后は先に待っていた。

頭の左右で翼のように広がった髪は彼女が考案したもので、後宮の后妃たちの間で流行していた。派手な簪や髪飾りではなく、白い小さな花を髪に散らしている。

裳は短いものが幾重にも重ねられていて、裾にふわふわした羽が縫いつけられていた。

手にした扇にも羽が飾られている。

背後に広がる春を盛りの羽律苑の景色と相まって、彼女は天女のよう見えた。

もしかしたら、庭園に合わせて逃えた衣装なのかもしれない。

「竜宮には及びませんが、羽律苑の花もなかなかのものでしょう？」獅皇后に尋ねられ、鈴花はうなずく。

故郷の花は狂い咲きだつた。美しいが風情に欠ける。

季節を待つて咲き、やがて舞い散る儂い花のほうが美しい。

そんな風に思うのは、眼前に立つ獅皇后の姿を重ねているからかもしれない。

二十代半ばの息子を持ちながら、彼女は柳のようにしなやかだ。絶世の美女という呼び名は獅家の圧力によるものではない。

獅皇后の左右には双子の侍女 やはり美しい。年ごろは竜蒼よりやや上くらいだろうか が控えている。三人の姿は一幅の絵のようで、鈴花は見惚れてしまった。

三人の後ろにいる背の高い侍女も美しい。

吸い寄せられるように視線を送ると、後ろの侍女は控えめに俯いた。

「天夫人」

慣れない呼び名に、戸惑いながらも獅皇后を見る。

「はい、なんでしょう」

「夫人は、男性でいうところの『公』の立場にあります。皇帝陛下のお子を身籠る以外にも、この後宮の婦礼を考えるという大切な役目があることを忘れず、下級后妃たちの手本となるようお励みく

ださい」

「はい……」

「また、毎日尚宮府において会合を行ないます。わたくしが朝議に出席した後になりますので時間はまちまちですが、迎えをやりますので必ずご出席くださいませ」

今上帝は政治に興味がない。

根っからの武人なのだ。竜天国に住むわざまな部族が風習や考え方の違いによって、あるいは利益を求めて起こす小競り合いを収めるのに忙しいという言い訳で、芳土宮の表には滅多に寄り付かない。もつとも即位するなり美女狩りを命じたほどの好きものだから芳土宮の裏に当たる後宮には足繁く通つている。大きな声ではいえないが、役立たずな皇帝の退位と優秀な皇太子竜蒼の即位を望むものは多い。

皇帝代理として朝議に出席し、政治的な決断を下す獅皇后は、ある意味芳土宮の裏表を取り仕切る最高権力者であった。

「かしこまりました」

鈴花は首肯した。

いつかこの女性を憎み、追い落としたいと思う田が来るのだろうか。

わからない。

今上帝はいまも軍を率いて各地を転々としており、鈴花は代理の官吏と儀礼的な式をおこなつただけで、まだ彼の顔も見ていなかつた。

十一年前に竜蒼と婚約したときも、父親の竜青は竜宮には来ていなかった。

代わりに獅皇后が息子たちを連れてきていたはずなのだが、あのときの女性と眼前の女性が同一人物とは思えなかつた。鈴花が成長したからだろうか。いまの鈴花には、獅皇后があどけなさを残した少女のように見える。

それでいてじつと見つめていると、老仙人を前にしたらこうなの

かもしれないと思つほど、深いなにかが伝わつてくる。

「最初から難しいことはわからないでしょ。しばらくの間わたくしが教育係としてつきますので、なんでもお聞きください。後宮の辯は込み入つていてわかりにくいもの。一度で理解出来ないのは当たり前ですから、何度でも聞いてくださいね」

天領の姫だから敬つてくれているのか、あるいはもとからの性格か。

獅皇后の口調はやわらかく、どこまでも丁寧だった。

鈴花がうなずくと、彼女は微笑み、ぽん、と持つていた扇を閉じた。

「では、お近づきの印に迷藏をいたしましょう

「……は、はい……」

「探すのはわたくし。隠れるのは天夫人と泡玉に泡珠

「はい、皇后陛下」

双子の侍女が声を揃える。

「それから……」

背の高い年かさの侍女を振り返り、獅皇后は笑みをこぼした。

「子波ね？」

侍女は無言でうなずいた。

「幽海たち宦官は、羽律苑に入るものがよいよ監視をなさい。もちろん隠れるものたちが部屋に帰ろうとしても止めるのですよ？」

「御意」

獅皇后は手にした扇を広げて顔を覆う。

「さあ、始まり始まり。百数えたら探しにいきますよ？ 急いで急いで」

ふつと、鈴花は気づいた。

獅皇后の口調はやわらかく丁寧なだけではなかつた。子どもに話しかけるときの親のものと同じ愛情がある。

故郷の母を思い出して唇を噛む。

……どうして。

どうして獅皇后を母と呼べないのだろう。

どうして十一年間想い続けた相手ではなく、その父親に嫁ぐことになつたのだろう。

「……じゅーう、じゅういち、じゅう二……」

潤んだ目を拭い、鈴花は林になつた場所へと駆け出した。

しゃらん。

簪が鳴る。

鈴花は近くにあつた木の幹に背中を預けた。

竜宮とは少し違うけれど、草木の匂いに心が休まる。

後宮には后妃たちの香の匂いが充満していた。嫌な匂いではないのだが、刺激的過ぎて疲れてしまう。

与えられた家の中は心地良かつたけれど、輿に乗つてているとはいえ、そこに帰り着くまでは苦しそうだ。

その強過ぎる香は皇帝を引き寄せるための后妃の努力だ。

天領の姫として苦労を知らずに生きてきた自分が、高みを目指して戦ってきた后妃たちと競い合い生き残ることが可能なだろうか。わからない。

いつそ季節を過ぎた花のよつて、舞い散つたほうが潔くて美しいのかもしれない。

地面上に積もつた落葉を踏む音に顔を上げる。

背の高い侍女、子波だ。

こちらに近づいてくる侍女の顔を見ていると、なにかが頭で蠢いた。

？

獅皇后、獅晶波、波、子波、子どもの波、波の子供

？

皇后の子どもはひとりだけだ。

「……竜蒼様……？」

彼はイタズラな表情で片手を瞑つて見せた。

骨ばつた長い指を薄い唇に押し当てる。結構口が大きい。

「ダメですよ、姫様。後宮は皇帝以外の男子禁制なのですから

？

確かに竜蒼の顔だ。

十二年ぶりでも見間違えるはずがない。

数日おきに届けられていた竹簡が運んできた番と、同じ番りもする。

それにして、なんと美しいのだろう。

最初から背が高いとは思っていたものの、男だとはかけらも思わなかつた。

獅皇后に似ているが、端整な顔は母親よりも凜としていて好ましい。

小声でも響く澄んだ声が、そつと鈴花の耳朶を打つ。

「数年前に忍び込んだ碧が処刑されたことは知つていいでしょう？」

「皇帝の息子であろうとも、捷を破れば罰を受けます」

第一皇子の碧は、父親の后妃に横恋慕をして後宮に忍び込み、彼女を身籠らせたのだと聞いていた。彼は罰を受け、后妃のほうもいまは後宮にはいない。夫人だった彼女の抜けたあとに鈴花が入った形になる。

「……どうして……？」

竜蒼の瞳が、真つ直ぐに見つめてくる。

「父は病です。胃の腑に瘤が出来て血を吐いています。もう長くはないでしょ。だからこそ父は、天領の姫であるあなたを娶ることで真の皇帝になろうとしているのです」

今上帝は成り上がりものだ。竜の姓を持つものは少なくなかつた。獅家の娘を妻にしていなければ、反乱軍が先帝を倒しても衛尉にすらなれなかつただろう。

いまも政治に無関心な態度を責められ、みなに退位を望まれている。

「本当はいますぐあなたを救い出したいけれど、そこわい……と言つて良いのかどうかはわかりませんが」

竜蒼が苦笑を浮べる。

「父の病状は悪化するこっぽうですし、南部尾州の諍いが長引いて

いるから、しばらくは帰れないでしょう。時間がすべてを解決します」

鈴花は彼を見つめた。

今上帝の病死を待つ。それは正しい判断だ。もし反乱を起しけば、本人だけでなく一族郎党が罰を受ける。

鈴花の胸がざわめいた。

新しい皇帝は先帝の後宮から実母以外の后妃を受け継ぐ権利がある。

もちろん彼女たちを解放しても良いし、侍女や召使い、婢という形で残しても良い。

何代か前の皇帝が北の遊牧民の血を引いていたことから取り入れられた風習だ。

このまま今上帝に散らされることなく、ときが過ぎて、即位した竜蒼のもとへ行くことが出来たなり……鈴花は唇を噛んだ。思い出したのだ。

数年前、碧皇子が処刑された後、密やかに広がった噂がある。后妃が身籠つたのは、本当は蒼皇太子の子どもだったに違いないと。

そうでなければ獅家が必死になつて、后妃の命を救つたはずがない。彼女の子どもが竜蒼のものだつたからこそ、後宮放逐で済ませたのではないか。

嘘だとは思つてゐる。

母親の違う竜蒼と竜碧兄弟の仲が良かつたとは思えないけれど、彼は異母弟に罪を着せて平氣な人間ではない。

でも気づいてしまつたのだ。

結局は同じことだ。

即位して後宮を作れば、竜蒼はだれかひとりのものではなくなる。

国のために、跡取りを作るため、貴族たちとの関係を友好に保つため、皇帝はすべての后妃と平等に夜を共にするのだ。

「……姫様……」

漆黒の瞳が鈴花を見つめている。

「そのときが来たら、あなたを迎えて来ても良いですか？」

鈴花も竜蒼を見つめ返した。

嫌だと、竜宮に帰りたいと言つても、たぶん彼は聞いてくれる。

……わたし。わたしは……

## 龍皇帝の庭（後書き）

＜『龍花の約束』につづく＞

## 竜花の約束

「……はい」

うなずいたのは反射的なものだつた。  
深い考えはない。流されたのだ。

竜天國は男尊女卑だ。比較的女性の地位が高い竜宮で天領の姫として崇められて育つた鈴花でも、男性に逆らうことには慣れていない。

けれど。

「良かつた」

力強い腕に抱き寄せられる。

女性の格好をしていても、その胸は広く逞しいことがわかつた。  
感触に戸惑う。筋骨隆々という風ではない。でもその体は確かに  
男性のもので、鈴花とはまるで違う。

なんだか体が火照つてくる。

弾んだ声が耳元で言つた。

「本当は不安だつたのです。数年前に妙な噂が流れたでしょ？」  
もしかしてあなたが、あれを本気にしているのではないかと

「そんな……」

声が上擦る。嘘だと思つてはいるが、気にしていたのは事実だ。  
竜蒼の腕に力が籠る。後ろで乾いた音がした。

「竜蒼様？」

「いけない」

彼は満面の笑顔を浮かべていた。

「後宮でこんなことをしていたら、男だと氣づかれなくとも、魔鏡  
(G)だと思われて罰を受けてしまいますね」

「え、ええ。……あの、なにか落とされませんでしたか？」  
「なにか？」

竜蒼は自分の服の袖を覗き込んだ。

彼の顔色が変わる。

鈴花も振り返り、さつきの音の主を探す。

真っ黒に乾燥した植物の輪が、林の下草の上に転がっていた。

「……覚えてらっしゃいますか？」

しゃがみ込み、竜蒼がそれを拾う。

「もしかして……？」

「はい。十一年前に頂いた花冠です。母の実家が薬品に詳しい一族なので、防腐処理を施したのですが、残念ながら色を保つのは無理でした」

心臓がざわめく。

どうしてこんなものを持ち歩いてくれているのだろう。

なんだか期待してしまつ。だつて価値のあるものではない。子どもが作つて、優しい年上の許婚に押し付けたものに過ぎないのだ。

鈴花の視線に気づいた竜蒼の顔から笑みが消えた。

痛いほど熱い視線が鈴花を射る。

長い骨ばつた指が髪に触れた。彼は安堵しているかのように息を吐き出した。

「夢じやない。本当のあなたが目の前にいるのですね」

鈴花は首肯した。

そのまま顔を上げない。竜蒼の視線が怖かったのだ。

「十一年も会わないでいた許婚、しかもいまは夫の息子に過ぎない男に愛を打ち明けられても困るでしょう。でも、私はあなたを愛しています、天領の姫」

首を横に振る。

自分には彼に相応しいものなどなにもない。

生まれ持つているはずの不思議の力さえないので。

髪をなぞつていた指先が、頬へと伸びる。竜蒼の爪先は硬く冷た

い。

指先が顎をつかみ、鈴花の顔を上げさせた。

彼の口元に意地悪な笑みが浮かんでいる。

「天領の姫としてのお力がないことを気にしていらっしゃるのですか？」

「……はい。わたしは、ひとびとの期待を裏切つてばかりです」

竜蒼が吹き出す。

「いまはもう、自分のことを名前で呼ばないのですね」

「当たり前です！」

不意に顔が近づいて、鈴花は息を飲んだ。  
どうして服装に惑わされて、侍女だなどと思つたのだろう。彼は男性だ。

筋の通つた高い鼻にいまにも触れそうで、無意識に体が後退する。しかし逞しい腕がそれを許さなかつた。

「私は嘘つきなんです。自分が相応しくないとわかつていても、上辺を取り繕つて、みなを誤魔化して生きてきました」

「そんな……」

「だから、最初はあなたの方が嫌いだつたのです。……自分を見ているようで。甘やかされて育つた天領の姫、血筋の上に胡坐をかいて、なんの力もないのに愛され受け入れられている」

事実だ。

恥ずかしくて彼から視線を逸らしたくなる。

顎を支える指の感触は優しいのに、鈴花の力ではびくともしない。

……竜蒼様は違うのに。

せめて首を横に振りたい。彼にはちゃんと、皇太子としての実力がある。竜宮に閉じ籠もつていた身にも噂は届いてきた。

「けれど花冠をいただいたとき気づいたのです。力がないことに罪はない。おのれの領分をわきまえて努力することが大切なだと。姫様……鈴花。あなたがいなかつたら、私はきっと自分を好きになれなかつた」

唇が重なる。

薄いけれど情熱のぬくもりを帯びた唇だ。

しばらくして顔を離した竜蒼は、照れくさそうな笑みを浮かべて

いた。

少年のようだ。

「こんなことをしていたら、本当に魔鏡だと思われてしましますね」

「竜蒼様！」

鈴花は彼の腕をつかんだ。夢中で尋ねる。

「どうなさつたのです？」

青年の漆黒の瞳には涙が滲んでいた。

「……本当はイヤです。あなたが父の后妃でいるのは。このままあなたを連れ去りたい。父の手が触れなくとも、ここにいるだけで危険が多い。この国も皇太子としての立場もどうでも良いから、あなたをさらつて行きたい」

「竜蒼様……」

後宮には多くの陰謀が渦巻く。

下級后妃の話だけれど、廁に行つたまま帰らないものもいたと聞いている。

命を奪われないまでも嫌がらせは日常茶飯事だらう。

「……待っています」

鈴花は竜蒼の胸に顔を埋めた。

今度は反射ではない。自分の意思だ。

彼が好きだつた。ななつも年上なのに、自分の前で子供ものように涙する青年が。

自分が彼の役に立てるか、力になれるかはわからない。

それでも一緒にいたいと思つた。

竜蒼の背中に腕を回し、力を込める。

「ときが来るのを待つています。だから……」

もし薔のままでいられなかつたとしても、側にいさせて欲しい。

皇后でなくていい。召使いとしてでも、彼の雑事を執り行つ婢としてでもいい。

竜蒼が苦しんでいるときに、抱き締めてあげられる場所にいたかつた。

天領の姫としての力を持たない自分にも、きっとそれくらいなら出来る。

「はい。……待つていてください」

風が、さやさやと林を揺らす。

鈴花は幸せを感じていた。たとえ現実には一瞬に過ぎなくても、このぬくもりは胸の中に永遠に灯る。そう、信じた

「口付けくらいはしたのですか？」

帰りの輿で獅皇后に聞かれた。

もちろん聞かれて困る相手はここにはいないものの、だれが、だれと、は口にしない。

彼女の後ろで竜蒼が苦虫を噛み潰したような顔をしている。もちろんまだ侍女の格好だ。

鈴花は答えなかつたが、獅皇后はうなずいた。

「それは重賛。あのいやらしい男も、脣だけは見逃してくれますからね」  
彼女の口元は扇で隠されていたけれど、瞳には悲しみの色が浮かんで見えた。

一ヶ月が経つた。

このまま皇帝が戻らないのなら、ここでの暮らしも悪くない。

鈴花はそう思うようになつていた。

ときどき事実を忘れそうになる。自分は皇帝に嫁いだのではなく、いまも竜蒼の許婚で彼を待つているだけなのだと、都合の良い妄想に溺れてしまうのだ。

……いけないいけない。

気を引き締めて、鈴花は目の前の書を広げた。

糸でつながれた竹簡には竜天国の伝承が刻まれている。

竜亡き後、天に戻ろうとした天女をみなが止めた。

彼女の力がなくなれば、竜に蹂躪された大地が痩せ衰えるからだ。

天女は天に戻る前に夫の遺体を国中に振り分けた。

竜宮のある場所に頭、背骨の先に尻尾、左右に翼。竜の食らつた力が戻り、国は潤つた。

いまも大きな州の名前は、そこに眠る竜体の部位を示している。

「天夫人」

国のすべての書を集めた秘書省で声をかけてきたのは、さつきまで尚宮府で一緒に婦礼について考えていた、鹿夫人だつた。派手な飾りはつけていないが、やわらかそうな髪はゆつたりと波打つてている。

鮮やかではないものの落ち着いた色合いの服装と相まって、一緒にいるものを安らがせてくれる雰囲気がかもし出されていた。

鈴花よりひとつ年上だろうか。

おつとりした性格の持ち主で積極的に主張することは少ない。けれど時折口にする言葉には、だれにも侵すことの出来ない覚悟が感じられる、不思議な女性だつた。

本来后妃には平等に情けを賜るのが皇帝の義務だ。

今上帝は役目を果たしていない。

一時の虎夫人に対するように偏つた寵愛をする。第一皇子碧が后妃を身籠らせるなどという愚行に及んだのも、結局皇帝による後宮管理が疎かだつたからだ。

鹿夫人は身籠つた后妃の異母姉であつた。

彼女も彼女の妹も、皇帝自身の情けは受けでいないという。

「ここにちは、鹿夫人。なにかお調べになられるのですか？ あ、お邪魔でしたか？」

棚の前から体を避けると、鹿夫人は笑つて首を横に振る。

「いいえ。天夫人をお見かけしたので、追いかけてきたのです」「そうでしたか」

鈴花は微笑んだ。

後宮の暮らしを受け入れつつあるのは、皇帝が来ないからだけではない。

彼女や獅皇后が気を配ってくれていることも大きかった。

もつともだからといって、いつか竜蒼の時代が来たときに、鹿夫人と彼を共有出来るかといわれたら、血が冷えるのを感じてしまうのだけれど。

「実家から花茶が届いたのですが、ようしければ」一緒にいかがでしよう?」

鹿家は、貴族としてはそれほどの地位はない。  
しかし代々商売的な才があつて、珍しい物品や金銭には事欠かないといふ。

「ありがとうございます」

もちろん鈴花が鹿夫人を好ましく思うのは、そのためではない。  
慣れないと自分に声をかけ、こうして誘ってくれる気持ちが嬉しいからだ。

「虎夫人も一緒に緒なのですよ」

鈴花は止まってしまった。

虎夫人。第三王子玄の亡くなつた母親と同じ家の出だ。とはいえたゞの母ほどの寵愛は受けていない。情け自体受けていなければ、もう何人目になるのだろう。なぜか虎夫人は寿命が短い。皇帝の関心を得られない、すぐに儻くなつてしまつのだ。

いまの虎夫人は、鈴花と変わらない年ごろだつた。

「も、申しわけございません。わたし、用事を……」

「お探ししましたわ、秋葉様」

秘書省に甲高い声が響き渡る。

鹿夫人を字で呼んだのは虎夫人だつた。字は夏蓮。この国では竜と天女の血に守られた皇族以外の人間は姓名はあまり使わず、字で呼び合つてゐる。

虎夫人は西域の血が濃い。

黄色を越えて黄金に近い髪の毛が窓からの光を照り返している。  
肌は褐色、小柄なわりに手足が長い。

十二年間会つてゐないし噂も聞こえてこない竜玄もこんな風に成

長しているのだろうか。

……竜玄様は男性だから、もつと大柄でいらっしゃるのでしょうね。

頭の左右に広がった流行の髪は、煌びやかな簪や髪飾りで彩られている。袴には赤や緑で染めた羽と、細かく碎いた真珠が散りばめられていて、虹色に輝いていた。

新しい流行を作るのは獅皇后だが、それを真似て広げるのは虎夫人だった。

鈴花の存在に気づき、虎夫人の細い眉がゆがんだ。

「本日のお茶会、天夫人もご一緒に緒ですか？」

「ええ」

「ぱわあん、という感じで鹿夫人がうなずく。

ふたりの間に漂う空気を察していわないわけではないだろう。むしろ気づいているからこそ、ともに過ごす時間を作ろうとしているに違いない。

「わたくしたち、同じ夫人同士なのですもの。三人で仲良くしたいですわ」

すっかり逃げ出す気だつた鈴花だけれど、彼女の聲音には逆らえなかつた。

「そ、そうですね」

ふつと鼻で笑い、虎夫人が胸を張る。

「もちろんです。わたくしと秋葉様は前から仲良しですけど、天夫人はまだ後宮にいらしたばかりでお友達がいらっしゃいませんものね。仲良くして差し上げますわ」

感謝しようと視線が言つている。この上からの態度が、どうにも苦手だ。

「……ありがとうございます……」

……わたし、自分が天領の姫だということを自惚れているのかもしないわ。

自省しつつも、いつか竜蒼が皇帝になつたとしたら、彼女だけは

解放して実家に帰して欲しいと願わずにはいられない鈴花だった。

竜花の約束（後書き）

↙『獅子と蛇の終幕』につづく↙

## 獅子と蛇の終幕

唇は、惚れた男のために取つとけよ。

思い出しただけで腸が煮えくり返る。

この状況もだ。

獅晶波は夫を睨みつけた。体は宦官に押さえられてい。自由になるのは視線だけだ。

青皇帝こと竜青の手には竹簡がある。

初めて見るものだが、なにが書かれているかは想像がついた。いまの晶波を見たら鈴花は戸惑うだろう。いや、後宮の后妃たちはみな驚くに違いない。

獅皇后は殺氣を放つていた。

大きな口に薄笑いを浮べ、竜青が尋ねてくる。

「……なにか、言ひてえことはねえか？」

晶波は両脇の宦官に軽く視線を送つた。

「このものたちは年増好みなのですか。やけに体を触られました」

竜青は吹き出した。

「そりやあ仕方ねえ。獅家のお嬢さんは、ざこに毒を隠してやがるかわからねえからな」

言いながらも晶波を甘く見ている。

尋問なら相応の部屋でするべきだ。ここは後宮内の皇帝の寝室。皇帝と皇后の距離は近いし、晶波は手かせも足かせもつけられてい。身体検査にしたところで、竜青を案じる宦官に言わされて実行させたに過ぎないだろう。

椅子に座つた竜青が手を伸ばし、広げた竹簡を見せてくる。

晶波は首を伸ばした。宦官たちは体を押さえる力を弱めてくれない。

案の定そこには、虎家と敵対している貴族の名前が並んでいた。

皇帝暗殺計画の連判状。もちろん偽造だが証明の機会は与えられないだろう。

こんなところで取り調べるのは晶波を見下しているからではなく、裁判もせず、自分の手で始末をつけるつもりだからなのかもしない。

長年連れ添つた自分への情が、多少はあるのか。

あるいは虎家の入れ知恵か。

連判状の一番前にある名前が息子竜蒼ではなく、自分であることに安堵する。

安堵しながら不思議に思う。

虎家がもつとも邪魔に思つてゐるのは竜蒼のはず。息子の名前を書くことを押し止めたのはだれだ。竜青にも父親の情といつものが存在していたのか。

いや、ありえない。最愛の女が産んだ息子、竜碧でさえ処刑した男だ。竜蒼と晶波が庇わなければ、本当に殺していただろう。そんな男が後ろ盾を得るためだけに娶つた女の産んだ子どもに愛情を向けるはずがない。

晶波は溜息を飲み込んだ。

考えても仕方がない。もう自分は逃げられない。反逆の罪の連座で父の獅公がいる骨州に官軍が押し寄せるころには、とっくに自分は死んでいる。

自分を慕つてくれる侍女たちのことも助けてやれない。それが辛い。

……竜蒼は竜蒼でどうにかするでしょう。

もうどうしようもないの、そつ脱つことにした。  
出来なくても死ぬだけだ。

皇太子として生きることで壊れてしまつた息子だが、生き延びたならきっと彼女が癒してくれる。

天領の姫は竜青には渡さない。

「……役立たず……」

晶波のつぶやきに、竜青が眉を上げる。

「言いたいことはないかとおっしゃるので言つたままでです。役立たずの田那様」「おーおい、衝撃の告白だな。蒼は俺の子じやねえとでも言つのか？」

「そういう風にしか考えられないところが役立たずなのです。翔の都に入つて一番に命じたことが美女狩りとは皇帝が聞いて呆れます。ああ、でもそうでしたわね。各地で起こつた反乱に加担したのは、官軍から兵糧を奪つほうが儲かるからですものね。あなたはただの野盗の親玉。……竜姓ですらない」

竜でないものが皇帝を名乗れば忌まわしいことが起りるとこつ言い伝えを知らないわけではないだらうと、面面たちは顔色ひとつ変えなかつた。

仕える皇帝の血筋が本物だらうとなかうと、彼らは政変さえ起こらなければ良い。後宮がなくなれば行くところもなくなる存在だ。古い伝承など信じていないのである。

「美女を集めたはいいけれど、平等に相手をすることも出来ない。満足な管理も出来ていない。これを役立たずと言わないで、なんと言えば良いのです？」

竜青の顔からも余裕が消えてない。この分だと、虎家も知つているようだ。

獅家から距離を置くよになつたのは、竜玄の母に夢中になつたからではなく、虎家に秘密を知られたからだつたのかもしれない。眞面目な竜蒼に罪悪感を植えつけた事実は、虎家にとつては上手い汁を吸うための良い道具に過ぎないだらう。竜碧が荒れていたのも、そのせいだらう。当事者ではないといつのは氣楽なことだ。

晶波は頑垂れた。

そつと舌で奥歯を押す。

抜かれた親知らずの代わりに置かれた陶器の奥歯は、しかるべき

場所を押せば歯茎から外れる。中には骨州名物の毒が隠されている。身体検査で口腔を診られることは承知の上で、わからないよう偽装していた。

獅家の間が毒を隠し持つていることは、竜天国に知らないものはいない。

それが真実だということは竜青にも教えていた。もつとも場所だけは秘密。爪や髪だと思わせるよう振る舞ってきた。

これを使うときが来たらしい。

しかしそう早い。もうひとつだけ確認したいことがある。

「本当に役立たず。国はなにひとつ変わってない。民は不作と飢饉に苦しみ続けてる。こんなことなら前の皇帝のままで良かったでしょう。下賤の男が本当の皇帝になれるとしても思っていたのですか？」

竜を真似ても蛇は蛇。草むらで震えていれば良かったのに

「……天領の姫が皇后になりや、竜姓だらうとなからうと、俺が皇帝だ」

なるほど。竜青の気持ちはわかつた。

人間、死ぬ前は必死になる。

病で先が短いことを悟り、彼は二セモノではなく本物になりたくなつたのだ。ただの后妃ではいけない。天領の姫を皇后にするものが真の皇帝だ。

竜天国最初の皇帝にしたつて、天女を皇后にしなければただの化け物だつた。

彼の気持ちはわかつたが、晶波だつて死が近い。必死にならずにはいられない。

天領の姫を皇后にすることは許さない。

息子の竜蒼のためだらうか。

いや、違う。晶波は奥歯を舌で押した。噛み砕く。だれにも竜青は渡さない。

本当は鶯夫人だつて殺してしまったかった。

口腔にあふれた毒を唾液で練つて、左右の宦官に吹き付ける。

「うつー！」

「ああーー！」

ふたりが床に膝をつく。

周囲の宦官たちがざわめいた。

「てめえー！」

だれよりも早く剣を抜いた竜青の懷に飛び込み、晶波は夫と唇を重ねた。

初めて知る男性の唇は薄かつた。

指先で彼の頬を辿る。戦場暮らしで無精ヒゲが生えたままだ。美しいという言葉は似合わないけれど、整っていて精悍な顔。酒浸りで戦いに明け暮れていたせいで崩れた雰囲気はあるが、それでも視線を奪われる。

竜ではないものの、力強い野生の蛇だ。  
きつとだれにも飼い馴らせない。

胸が熱かつた。

動悸が高まる。激しい痛みが体を貫いていた。

竜青の剣が心臓を抉っている。衣が赤く染まっていく。  
だけど構わない。晶波の舌は竜青の唇を割り、彼の口腔に毒を流し込んでいた。

薄い唇の端から垂れる血は、毒のせいか病のせいか。

竜青が乱暴にそれを拭うのを見つめながら、晶波は床に崩れ落ちた。

こんなに幸せな気分になつたのはいつぶりだらう。  
もしかしたら生まれて初めてかもしれない。

「陛下っ！ だから申し上げたのです。反逆者と直接お会いになるのは危険だと……」

「うるせえ、黙れー！」

抱き上げられるのがわかつた。

硬く逞しい夫の腕。あまりに背が高いので、初対面のときは熊かと思つた。

「バカか、お前は。せっかく氣い使つてやつたのに、なんだつてこんなバカな真似……」

……だつて。

ずっと彼と口付けたかった。

幾度夜を過ぎしても、子を生しても、夫は口付けてくれなかつた。息子を太子にはしてくれた。翔の都に入つても晶波を廃しはしなかつた。皇后のままでいさせてくれた。

けれど晶波は口付けが欲しかつた。

ただ一度だけでもいいから　　だつて言つたぢやない。

たとえ親の都合で政略結婚したつて、口付けだけは惚れた男としろつて。

惚れた男が相手なら、片想いだつて構わないでしょ？

あなたはわたくしのもの。この一瞬だけは。

たとえ冥界に降りれば竜碧の母に取り戻されるとしても、この一瞬だけは晶波のもの。

ふつと、腕の中の女が軽くなつた。  
年を経るごとにあどけなさを増した、不思議な美貌が色を失つていぐ。

華奢な皇后くらゝ、もとから片手で抱ける。

竜青はいつまほうの手を伸ばして晶波の臉を閉じた。

それからふくらした唇の端から漏れた血を拭う。指先で互いの血が混じる。

紅を引いた唇は、まだ温かい氣がした。

周囲の画面がなにか言つているようだが、少しも耳に入つてこない。

意識も薄れていくようだ。

毒が効いてきたのだろう。病による腹痛ももう感じない。

……俺は、なんだつて皇帝になりたいだなんて思うよくなつたんだ？

いくら先が短いからといって、長年連れ添った皇后を無実の罪に陥れてまで、天領の姫を皇后にする必要はなかつたのではないだろうか。

晶波に言われたように、官軍に与えられるわずかな恩賞よりも、官軍を襲つて得られる兵糧が目当てで反乱軍に与した。

生まれつきとケンカで鍛えた大柄で逞しい体は戦いにだけは向いていた。

みなに英雄と褒め称えられて良い気になつて、宴席で冗談交じりに竜姓などと言つたら本気にされた。まさか獅公まで騙されるとは思わなかつたが、そこまでいくと否定も出来なかつた。

寄せ集めの反乱軍に獅公の私兵が加わり、腹を満たすことではなく国をえることが目的になつた。そんな大それたこと出来るはずがなかつたのに。

初夜に眞実を打ち明けたとき、晶波はなんと言つただろうか。

貴族なんて大嫌いだつた。

飢えたこともない姫君なんて、好きになれるはずがない。即位すれば嘘がばれるに決まつてゐるのだから、その前に姿を消す。

獅家の令嬢との仲はそれまでのつまみ食いに過ぎない。

女に不自由したことなどなかつた。羽振りさえ良ければ、女はいくらでも寄つてくる。

竜壁の母親のように、だれだつて自分の飢えを満たすことしか考えていない。

世間も苦労も知らないくせに、民の窮状に胸を痛めていた姫君は、竜青の告白に微笑んだ。それは覚えている。

あまりに邪気のない笑顔を見ていたら、触れるのが怖くなつたことも。

少なくとも唇を重ねることだけは許されないと思つた。

だれが言つていたのだろうか。

言葉には魂が宿る。その言葉を吐き出す唇は、心の一番深いところに通じてゐる。

だれに聞いたかは思い出せなかつたが、竜青はべつの「」を思い出出した。

そうだ。絵姿で見た天領の姫は、少しだけ若じの晶波に似ていた。

なんとなく丸いところと、ふくらした頬。よくつねつて怒らせたものだ。

竜青は自分の本当の姓を思い出せなかつた。最初からなかつたのかもしない。

先帝の御世はだれもが飢えていた。顔もわからない竜青の母親だつて、食べるためならだれとでも寝ただろうし、父親が逃げたのなら子どもを育む氣力も出なかつただろう。

自分でつけた青という名前を聞いて、空の色だと言つたのは晶波だ。

そんなんつもりはなかつたのに、言われた途端そうだと思った。青い空が好きだつた。

本当は最初からわかつていたのかもしない。

こんな状況になれば、皇后がこう行動することは。

ひとりで死んでいくのがイヤだつただけかもしないと告げたら、無実の罪に落とされた晶波はどんな顔をしただろうか。

最初から本気で処刑する気はなかつた。どんなに虎家に言われても、それだけは食い止めた。自分さえ死ねば後は竜蒼がなんとかする信じていた。

虎家だつて竜天国を根底から搖るがすような真似はしない。

竜玄を皇帝にするためにも、青の秘密は隠し通すだらう。

目がかすむ。

空気が揺らぐ。視界に蠢く影はだれだ。

宦官だとはわかつてゐる。わかつてゐるけれど……べつのだれかなら良いと思う。

そのだれかに、心の中で尋ねてみる。

……なあ、だれのためだつたんだよ。

後宮に入った晶波は、どんどん美しくなつていった。

新しい髪形や服装を考案し、化粧だつて次々と開発していく。気に入らなかつた。出合つたこの姿が一番好きだつた。口には出さなかつたけれど。

好きな男が出来たのなら、青など捨てて行つてしまえば良かつたのだ。

いや、美女狩りの時点で愛想を尽かしていれば良かつたのに。

あの夜聞いた晶波の声が蘇つて耳朵を打つ。

たとえそれが本当のことだとしても、青様なら大丈夫ですわ。民の苦しみをだれよりもわかつてりしゃるのですもの。わたくしも及ばずながら力をお貸ししますので、立派な皇帝陛下におなりくださいませ。

毒を吹きかけられた宦官のひとりは毒が目に入つて失明し、のちに自害した。もうひとりは毒を拭つた指が口に触れ、そのまま死んだ。

雌獅子と龍になりたかつた蛇は、抱き合つ姿で息を引き取つた。

反逆者と皇帝と一緒に葬れるはずがない。けれど、龍青の手は晶波の手を握つたまま固まつていた。宦官たちがなにをしようかと離れるることはなかつた。

獅子山の晩暮（後書き）

『虎の晩』につづく

鈴花は首を傾げた。

今日はまだ獅皇后の迎えが来ない。

皇后をはじめとする上級后妃には一軒家が与えられているが、昨夜急に戻った皇帝は自分の寝所に獅皇后を呼び寄せた。

本来なら伽の順番には細かい決まりがある。

その辺りのいい加減さも、今上帝の問題点のひとつだった。

……でも良かった。

呼ばれたのが自分でないことには安堵していた。

安堵しながらも、今上帝が竜蒼だつたらと思つと背筋が凍つた。あのときうなずいたのは間違いだつた気がする。

竜蒼は真面目な青年だ。まあ女装してまで鈴花に会いに来たのはともかくとして。

彼は後宮の掟を蔑るにはしないだろつ。

百二十人前後の后妃たちに対して、公平に接するに違いない。どれくらいの周期で会えるのか。

そして、彼がほかの后妃と過ごす時間をどう耐えれば良いのか。

鈴花にはわからなかつた。

「今日は尚宮府での会合はないのでしょうか？」

仮面の宦官、幽海は答えない。

彼にもわからないのだ。

部屋で楽器の練習でもしていようか。

会合がないのなら、鹿夫人を誘つて尚功府を覗きに行くのもいいかもしない。完成品や外から仕入れたものは内侍省で売つているが、召使いたちが作つている途中の細工ものを見せてもらひのうも楽しいものだ。

たぶん向こうにしてみたら、上級后妃に見られても緊張するばかりだろうが。

尚服府に頼んだ羽を飾った裳はまだ出来ていないと思つから、羽律苑の舞台で、宦官劇団の公演を見てもいい。

鹿夫人となら、どこに行つても楽しいはずだ。彼女は少し獅皇后に似ている。

けれど。

……虎夫人もご一緒にいらっしゃるでしょうね。

そこに思い当たり、鈴花は溜息をついた。

虎夫人は鹿夫人に懐いている。

魔鏡の仲だと噂されているほどだ。

後宮の辻では罪になるものの、鈴花は個人の嗜好に口出しする気はない。

父親の後宮でその死を願い、彼の息子が迎えに来る日を待ち望んでいる自分以上に罪深いものなどいだろう。

……虎夫人と仲良くなるための好機と思えば良いのだわ。でもおふたりが本当に魔鏡の仲だとしたら、わたしはお邪魔なのかしら？  
新たな悩みが生じたとき、ひどく慌てた様子の侍女が客の訪れを告げに来た。

思つていた以上に大きくなつていた。

服の上からでも筋骨隆々とした体がわかる。

竜天国の衣装が似合わないことを自覚しているのか、服の上から大きな虎の毛皮を纏つていた。野性的な雰囲気が彼の魅力を引き立てている。

蒲公英のようだつた黄色い髪が煌いていた。

虎家の血を引きながら、話に聞く南方の獅子の髪のようだ。

褐色の肌。鋭い眼光を放つ青い瞳。唇は固く引き締められている。だけど。

「竜玄様！」

鈴花は真っ青になつて、彼に駆け寄つた。

相変わらず鈴花よりも大きい。

十一人も経つていい。なのにすぐに竜玄だとわかった。そして心配になつた。

「後宮は皇帝以外の男子禁制ですよ。こんなところに入つてはいけません。ほら、わたしが上手く誤魔化してあげますから、早くお逃げなさい！」

青い瞳が細くなる。

「変わらないですね、あなたは」

低い声が甘く耳をくすぐり、ぞくつとする。  
あわてて目をそらす。

「か、変わりません。何百年経とうとも、わたしはあなたよりふたつ年上なのですから」

なぜだらう。心が子どもに戻つてしまつ。

竜蒼と会つたときはこんな風ではなかつた。  
許婚である彼とも十一年間会つていなかつたけれど、手紙の竹簡や贈り物で間接的に接していたからだらうか。

竜玄の十一年間はまるで知らない。

だからどうしても七歳のときと同じ接し方になる。  
どんなに大きくても可愛い弟分のままだ。大切に守つてあげなくてはならない。

「あ、でも」

竜玄の口元が綻んだ。

「もう自分のことを名前ではお呼びにならないのですね」  
からかうような口調は五歳のころにはなかつたものだ。  
ちゃんと成長しているらしい。

「竜蒼様と同じことをおつしゃいますのね」

この兄弟の中にある、鈴花の印象はどんなものなのだろうか。  
青い瞳が曇つた。

「……蒼兄上にお会いになつたのですか？」  
「い、いえ！ そんなわけないではありませんか。後宮は男子禁制です。……ああもう！」

鈴花は、竜玄の大きな腕を叩いた。

「くだらない話をしていないで、早くお逃げなさい。」  
「うはわたし  
が食い止めます」

竜玄が吹き出した。

大きな体を丸めて笑い転げる。

「その細い腕で官軍を相手になさるおつもりですか？」

「ううう……」

鈴花は帯から薬を入れた袋を取り出した。

後宮に入るときに用意したものだ。竜宮の百花から作られている。  
ちゃんと許可も受けていた。

「怪我をしたときのために、これをお持ちなさい。使い方は薬の内  
袋に記してあります」

「義姉上……いいえ、鈴花殿」

笑い過ぎで滲んだ涙を拭い、竜玄が体をかがめた。

鈴花と視線を同じ位置にする。

「背中が痛くないですか？」

筋肉痛に効く薬も袋に入れていただろうか。

「大丈夫です。……鈴花殿。昨夜父が亡くなりました」

一瞬、なにを言われているのか理解出来なかつた。

竜玄の青い瞳に鈴花が映つている。

迷子になつた子どものように頼りなげな表情だ。

言葉を絞り出す。

「皇帝……竜青皇帝陛下がですか？」

喜んでいいはずだ。そのはず　なのに嫌な予感に胸がざわめく。

「ドウシテ、ココニイルノガ彼ジヤナイノ？」

竜玄は鈴花の問いに首肯して、話を続ける。

「そうです。獅皇后を尋問中に殺されました」

「だ、だれですか？」

本当に聞きたいのはそんなことではない。

「ドウシテ、ココニイルノガアナタナノ？」

「獅皇后……いえ、反逆者獅晶波にです」

「」、皇后陛下は……」

「聞かされても信じられないし、呼び捨てにこすることも出来ない。

「皇帝に斬られてお亡くなりになりました」

「そう、ですか」

鈴花はうつむいた。

もうこれ以上なにも聞きたくない。耳を塞ぎたい。

「反逆者の名簿に竜蒼という名前はありませんでしたが、実母の行動を知らなかつたとは思えません。獅家は反逆罪に連座、蒼皇子は死罪だけは免れますか一生軟禁されます」

力が抜けた体を竜玄が抱きとめる。

「新しい皇帝には俺が即位しました。これから骨州に獅家討伐に出立します。皇后となるあなたにもついてきて欲しい」

男の匂いに包まれる。

竜玄はそのまま鈴花を抱き上げた。立ち上がり、歩き出す。最初から気づいてた。わかりたくないなかつただけだ。

彼の後ろには宦官たちが控えていた。

後宮に入ることが許されていない人間に、彼らがつき従つはずがない。

大きな手が鈴花の目元を覆う。

「……良かつたら泣いてください……」

涙が出れば楽になれただろう。

けれど鈴花の瞳は乾いていた。

瞼を閉じると、落河で見た花の姿が浮かんでくる。ぐるぐると回る。

……どこまで流れていけばいいの?

いつそこのまま水底まで沈んでいたなら、なにも考えなくて良くなるのに。

竜玄の胸は温かく、それが胸を締め付けてならなかつた。

獅家討伐に出立する新しい皇帝の軍には、小さな宮殿並みの機能を持つ輿が同行していた。天皇后のためのものだ。

竜天国中央、東西を右州と左州に挟まれ、南北を頭州と尾州に囲まれた骨州に向かつ。

獅皇后の故郷であり、先帝竜青の出身地でもある。

始祖である竜の背骨が大地に埋まっているといわれながらも土地が貧しく、不作になると真っ先に飢饉となる場所だ。それでいて、なぜか薬や毒の産地として名高かつた。

「……父が立ち上がったころの飢饉は特に激しく、同じ村の親同士が子を交換して食らうこともあります」

何十頭もの馬に牽かせた巨大な輿は、船のよろよろするやかに揺れる。

皇后の主寝室にいるのはふたりだけだ。

皇帝は皇后を膝に抱いて、耳元で囁いている。低い声が子守唄のよとに心地良い。

心地は良いが聞いていても話が頭に入つてこない。

鈴花の胸には、その三十年ほど前の惨劇に対する哀れみは沸いてこなかつた。

……わたしはきっと、冷たい人間なのだわ。

だから天領の姫としての力に目覚めないのでどうか。

「獅家は私財を投げ打つて民のために尽くしました。虎家が朝廷での力を伸ばしたのは、このとき獅家の力が弱まつたからです。ですが獅家の財力をもつてしても国は救えなかつた。獅晶波の父である先代獅公は、国庫に眠る食料を人民に解放するよう訴えましたが、先々帝と側近たちに聞く耳はなかつた」

税として召し上げられた食料は、国庫に眠つたまま腐つていつた。追い詰められたひどびどが各地で蜂起したのも当然だらう。

その中には先帝竜青もいた。

彼は獅晶波を娶ることで獅家の援助を受け、遂に当時の皇帝を倒して即位した。

鈴花も歴史書を読んで知っていることだ。

「本当は父が即位するべきではなかつた。ただほかに方法がなかつた。竜姓だというだけで、なんの功もない人間が皇帝になつたのでは結局国が乱れてしまう」

けれど、と竜玄は顔をゆがめた。

「竜姓でない父が皇帝になつたのも間違いだつた」

鈴花は反射的に彼の唇に指を当てた。大きくて薄い唇だ。そんなこと考えたこともなかつた。

信じていいのかわからない。天領の姫としてどうすべきかもわからぬ。

ただ、それをほかのだれにも知られてはいけないのだということは理解出来ていた。

竜でないものが皇帝を名乗れば忌まわしいことが起つる。いろいろな説があるものの、大地に埋められた竜が暴れて不屈きものを退けるという説が最も一般的だ。

言い伝えに過ぎないとしても、民には衝撃が走り国は乱れるだろう。

大きな手が鈴花の手を包む。異民族の血のせいか。彼の体温はいつも高い。

竜玄は自分の唇から、鈴花の指を離した。

「虎家はそれを知つて父を脅した。あなたが蒼兄上ではなく父に嫁がなくてはいけなかつたのは、天領の姫による権威付けが目的です。父が亡くなると彼らは俺に目をつけた。眞実を明かして俺が退位するのを容易いけれど、それでは蒼兄上も地位を失つてしまつ

黄色い髪を揺らして、彼は言つ。

「鈴花殿。あなたは蒼兄上の、本当の皇帝陛下の皇后です。獅家には何度か公主が降嫁しているのだから、父の血筋など問題ではない」

しかしそれを大声で言つるのは憚られる。

後宮という仕組みからもわかるように、竜天国は男系社会だ。血筋は常に父親のものが尊ばれる。子どもが受け継ぐのは母ではなく

父の姓だ。

唯一の例外が天領であり、竜宮であった。

「ここでだけは竜の皇帝の血よりも、天女の血を引くことが重視される。」

「俺は……あなたと蒼兄上が、天女が真の竜と結ばれることだけを望んでいます。いまはなんの力もない虎家の傀儡ですが、やがて力を得て、おのれの手で帝位を蒼兄上にお返しします。もちろんそれまであなたに不埒な真似などいたしません」

虎が誓う。

鈴花は彼の顔を両手で包んだ。喜んでいいはずなのに、心が重い。でいる。

「竜玄様……泣かないで」

青い瞳は潤んでなどいなのに、なぜか彼が泣いているように感じてしまう。

「泣いてなどいません」

そう言い切る竜玄の腕。袖から覗く太い腕には包帯が巻かれている。

十一年前に自分が薬で治療したのと同じ場所だ。

軟禁されている竜蒼のことを想う心と目の前の竜玄の腕が気に入る心で、鈴花はふたつに引き裂かれていく気がした。

竜玄が膝の上の鈴花を抱き締める。

これは演技だ。

虎家を騙し、竜蒼を救うための演技に過ぎない。

自分を抱き締める太い腕は、十一年も会つていなかつた、ほとんど初めて会う男のものだ。そこに心を惑わされる理由などない。ないはずだ。

ドウシテ？

後宮で再会したときから、青い瞳が鈴花を逃がしてくれない。どうして竜玄は、いつか異母兄に返す皇后をこんなに熱く見つめるのだらう。

胸の奥に灯つた炎の意味を、鈴花は知らなかつた。

虎の誓い（後書き）

『虎の想い』につづく

## 虎の想い

遠征に出て、どれほど日の日数が過ぎただろう。

骨州に入るなり戦争が始まるのかと思つていたけれど、そうではなかつた。

以前ほどではないにしろ、骨州は不作と飢饉に苦しめられている。飢えを満たすために食らつたのか。春だというのに、街道沿いには野の花がない。

帝都翔から州都立までは、どんなに急いでも三ヶ月はかかる。大きな輿が一緒ならば、さらに時間がかかるだろう。

獅家の主だった人間は立に集まつていると聞く。

反逆が真実であれ偽装であれ、皇帝が軍を率いてやつて来るので。弁明するにしろ抗戦するにしろ力が必要だ。

時間がかかるだけ獅家は結束し強敵となる。

鈴花の存在は軍のお荷物だった。竜宮の姫は馬に乗れない。どうしても輿がいる。

お荷物でいて必要不可欠な存在でもあつた。天領の姫を皇后にしたということで、虎家に反感を持つ貴族たちも渋々ながら竜玄の即位を認めたらしい。

獅家との決戦が始まれば近隣の貴族たちが馳せ参じることだろう。竜玄が獅家の血を引く異母兄に皇帝としての正統性を認めているように、竜蒼のほうが即位すべきだと主張するものは多い。先帝青が戦い以外では役立たずだつたせいもあり、獅皇后は反逆者ではなく真に国を思つた天女の化身だと称えるものもいる。

いざというとき竜玄に従うものを増やすため、鈴花はいるのだった。

もつとも皇帝の真意はわからない。

彼は本当に獅家を討つつもりなのだろうか。

いざれ竜蒼を帝位につけるのなら、後ろ盾となる外戚は残してお

いたほうが良からう。

「……鈴花殿……」

主寝室の扉を開け、竜玄が呼びかけてくる。

彼は日々忙しい。

兵士や自分自身の鍛錬もあるし、皇帝としての勉強もある。同行している虎家の人間の主張を聞いて、いまから骨州の分配について会議もしているようだ。

もちろん翔都と連絡を取り合って、竜天国 자체の政策も決めている。

鈴花のほうはするべきことはなにもなかつた。

虎家中心の会議には参加させてもらえなかつたし、侍女はいてもほかの后妃はいないので、婦礼について考える必要もない。裁縫や音楽などの娛樂は用意されていたものの、あまりその気にはなれなかつた。

竜玄とは毎夜ともに過ごしていたけれど、もちろん伽を行うことはない。

ただ同じ部屋で眠つていていただけだった。

秘密話をするときには膝に抱かれて顔を近づけているが、睡眠を取るときのふたりの間には竜玄の剣が置かれている。彼と同じように大きな剣だ。

鈴花は、胸に穴が開いたように感じていた。  
自分がどうするべきなのかを見出せない。

後宮ならば、たとえ皇帝が変わろうとも后妃にも召使いにも婢にも役目があり、それだけは変わらなかつただろう。

新しくつけられた侍女たちにも心を開けない。彼女たちは虎家の間者でもある。

結果鈴花は、一日の大半を眠るか眠つた振りをして過ごしていた。このまま淡雪のように溶けて消えてしまいたい気分になることもある。

侍女に体を揺らされた。

「皇后陛下」

鈴花は瞼を上げなかつた。

このまま寝た振りを続けよつ。起きていても役に立てることはな  
にもない。

ただいればいいだけのお飾り人形。

所詮はいつわりの花嫁だ。

衣装や装身具も用意されていたし、三日にも一度は風呂にも入れて  
もらつてゐる。

しかし着飾ることは虚しさしか呼ばない。

鈴花は清潔であること以外は気にしなくなつてゐた。

髪も結つていない。最近は侍女のほうが華やかな姿をしてゐた。  
さらさらと衣擦れの音が遠ざかる。侍女たちが部屋から出された  
よつだ。

すぐには鈴花を起こすまいとしているのだろう。大きな体の竜玄  
が、足音を立てずに近づいてくる。足音もないのに近づいてくるの  
がわかるのは彼の熱い視線を感じるからだ。

ちりちりと皮膚を炙られる。

あの青い瞳には、きつといま鈴花しか映つていない。

ふわりと空気が動く。

大きな手が鈴花の髪に触れる。

震えそうになる体を必死で止める。

持ち上げられた髪に、竜玄が唇を落とすのがわかつた。

……やめて！

叫びたかつた。

真実の皇后ならば笑いながら体を起こして、皇帝を抱き締めれば  
いい。

巨大な軍の孤独な皇帝。彼を支持する虎家ですら味方ではない。  
本当なら皇后はただひとりの味方であるべきだ。

異母兄の悪ふざけで腕を斬られても、ただ泣くことしか出来なか  
つた子どもにしたように癒してあげたい。不思議の力はないけれど、

百花から調合した薬は扱える。成長してお湯も沸かせるようになつたので、薬効のあるお茶だつて淹れられる。

だけど鈴花は違うから、彼に對してなにも出来ない。

なにもしてはいけないのだ。

だからやめてほしかつた。心を乱さないで欲しい。

やめて欲しくてたまらないのに、やめないで欲しいとも願つてゐる自分が、嫌で嫌でたまらない。そして、そんな気持ちにさせる彼が憎かつた。

……竜蒼様。

十二年の月日を思い出そうとする。

届いた言葉、贈り物、そしてほんの少しだけ前の林の匂いと彼の熱。

だけど無理だつた。記憶はおぼろげに漂うばかり。いま側にいるのが竜蒼ではないということしか思い出せない。かすかな甘い溜息のあと、竜玄は鈴花の髪を下ろした。そつと、優しく鈴花を揺らす。

「……鈴花殿……」

低い男の声が甘く耳朵を打つ。

遠いむかし、竜宮の庭で泣いていた子どもと同一人物とは思えないほど大人びた声だ。

ふたつ年下の少年だ。これまでもこれからも年齢の差は変わらない。

「……鈴花殿……義姉上」

だれにも聞かれなによつ、じつそりと囁かれた呼び名に心臓がつぶされる。

竜玄にとつての鈴花は竜蒼のもので、それも年齢差と同じよつて絶対変わらない。

だけど。

あの腕の、袖の中に隠された腕の包帯の下にはなにがあるのだろう。

もしかしたら、もしかしたらあそこには。

……考へても仕方がない。

鈴花は、いま起きた風を装つて体を起こした。

「……竜玄様？」

青い瞳を見つめると、少年は十七歳相応の笑みを見せた。  
「お休みのところ申しわけありませんが、お願ひを聞いていただけないでしょつか？」

「……はい、どのようなことでしょうか？」

彼はお飾り人形になにを願うのだろうか。

かつて竜宮で救いを求めるひとびとを前に覚えた無力感が沸き上がる。

それでいて胸がときめくのも感じる。

風に舞う花びらのように、水を流れる薔薇のように、鈴花は翻弄されている。

ほんのわずかな邂逅だったけれど、鈴花は竜蒼と約束をしたのだ。  
竜玄の視線に捕らわれるなんてありえない。あつてはならないことだ。

それでも鈴花は、春を待つ花のように彼の言葉を待たずにはいられなかつた。

櫛を持つた侍女が、鈴花の耳を出して髪を整える。

左右に広げる髪型は反逆者獅皇后が発案したものためか、以前流行していた、一度ひとつにまとめてから、後ろでベールのように広げる形にされた。

ひと房ごとに碎いた真珠を散りばめた布を絡め、まとめた部分に簪を刺す。

しゃらん、と揺れる。

なめらかに肌を滑る絹の衣、色鮮やかな裳には毛皮が飾られている。

かなり古い意匠だが、虎の毛皮を纏つた皇帝の横に立つには相応しい。

宝石をあしらつた金の首飾り、耳飾りには羊脂玉 最高級の玉。

侍女の筆が白粉と紅を載せる。

「皇后陛下、どうぞ」

鏡に映つているのは、鈴花の知らないだれかに見えた。紅を落とさないように気をつけて、唇に指を近づける。あの日、羽律苑の林で童蒼と交わした口付けの記憶が重い。重いと感じる自分が嫌だ。

腕を降ろし、軽く頭を揺らす。

しゃらん。

簪の鳴る音だけは幼いころと同じに聞こえる。

目を閉じると瞼の裏に竜宮の百花が蘇つた。

なんの力もない天領の姫だが、飢えた骨州の民に食べものを配るくらいは出来る。

虎家の反対を押し切つて軍の兵糧を分け与えることを決めた竜玄が、鈴花に役目を与えてくれたのだ。

……わたしに出来ること。

瞼を開ける。侍女たちが立ち上がるのを助けてくれる。

べつの侍女が部屋の扉を開けてくれた。

すぐ外で皇帝が待つていた。

鈴花を見ると息を飲み、それから悲しげに微笑む。だれもいなかつたら、こいつぶやいたに違いない。

『蒼兄上がご覧になられたら、さぞお喜びのことでしょう』

と。

差し出された大きな掌に指を預け、鈴花は輿の外に出た。手は硬く、剣で出来たタコがいくつもあった。

無骨そうなその手が、羽よりも優しく自分に触れるのを鈴花は知っている。

広がるのは骨州の荒れ果てた大地。

花もなく草もなく、骨のような木々が風に揺れている。

空は雲に覆われて灰色に染まっていた。

凍えるような気温ではないものの、春だとは感じられない。

そんな光景の中にあると、華やかな輿も巨大な軍も滑稽にしか見えなかつた。

湯気を上げる大きな鍋の前にひどが並んでいた。

鍋をかき混ぜながら、兵士が大声で皇帝への感謝を強要していた。

こちらの存在に気づいたのか、兵士たちがざわめき始めた。

骨州の民もこちらに向き、無数の視線が鈴花を射る。

むかし、竜宮にいたころは救いを求めるひとびとの視線が怖かつた。

いまだつてなにも変わっていない。

天領の姫としての力はないし、皇后としても実権がない。

しかし縋るように自分を見る骨州の民を怖いとは思わなかつた。

天領の姫に対する期待や憧憬も、皇后に対する願いや羨望も、苦勞知らずのお飾り人形に対する嫌悪や憎しみも、なにも怖くない。

一番怖いものは背後に立つている。

どんなに離れても絡みつき、けして消えよつとはしない青い視線だ。

いや、怖いのは彼じやない。

怖いのはぐらぐらと揺れる自分の心。

竜蒼を裏切ることではなく、裏切つて竜玄に軽蔑されること。

## 虎の想い（後書き）

竜蒼は裏切れない  
心に嘘はつけない

『虎花散華』につづく  
『虎花乱舞』につづく

身も心も疲れているのだな。う。

竜玄は一度眠ると朝まで目覚めない。

いっぽう日中寝てばかりの鈴花は、夜は起きていることが多かつた。おそらく生活が夜型になってしまっているのだ。今日は骨州の民に食事を配るという役目を果たしたので、疲れて夜眠れるかと思つていたのだけれど、逆に頭が冴えて眠れないでいた。

皇帝と皇后の間には剣が置かれている。

巨大な金属の剣だ。

暗闇に座り、壁の細工から忍び込んだ月光に照らされた竜玄の寝顔を見つめる。

あじけない少年の顔。毎日大変なせいか、眉間に皺が刻まれている。

皇帝になる前は將軍の位にあつたと聞いた。皇族のお飾り將軍ではなく、父とともに各地を回つて諂いを収めていた優秀な軍人だつたといつ。

情報源が虎家から来た侍女たちだといつことを差し引いても信憑性は高い。

輿の外にいた兵士たちも、鈴花には複雑な視線を投げかけてきたが、竜玄に向けるそれは信頼と愛情に満ちていた。部下に慕われているのだ。

じつと竜玄の寝顔を見ていたら、竜蒼の顔が浮かんできた。

印象が違すぎる所以考へたことがなかつたものの、ふたりとも口元がよく似ている。

唇が薄くて大きいのだ。父親似なのかも知れない。

……瞳は違う。

ほんやりと鈴花は思った。

そう、瞳は違う。色だけでなく、なにかが違う。

なのにどちらも視線は熱い。鈴花を捕らえて絡みつく。それも父親似なのだろうか。

ふたりは、どうしてあんな瞳で自分を見るのだろう。

不思議なのにわかる気もした。

胸の中、ただひと筋にだれかに向かう心は制御出来ない。時間もつながりも関係なく、ただ翻弄されるしかないのだ。

なにひとつ自分の思い通りにならない。

側にいるだけで胸がざわめく。心臓の動悸が激しくなつて、息をするのも苦しくなる。

辛くて切なくて泣きたくなるのに、離れれば体が切り裂かれそうに痛い。

気がつくと目が追つている。視線を外すことは不可能だ。

「……竜蒼様が好き……」

自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

これからどうなるかなどわからない。

翔都で軟禁されているという竜蒼と骨州を進む竜玄の間に、意思の疎通があるのかどうかも鈴花は知らない。

竜玄が望み通り竜蒼を帝位に就けたとしても、彼が鈴花を望むとは限らない。

異母弟との仲を疑つて、嫌悪されてしまうかもしれないではないか。

ふたりに密約があつたとしても、計画が上手く進むといつ保証などない。

竜玄が力を持つ前に竜蒼が殺されてしまうかもしれないし、どちらとも異なる竜姓のだれかが皇帝になるかもしない。

花はただ、流れに運ばれることしか出来ないのだ。

終着点など考えるだけ無駄だ。

目が燃えるように熱い。

「……竜蒼様が好き……」

もう一度つぶやく。

惜しみなく流れ落ちる涙の理由に、鈴花は気づかない振りをした。

数ヵ月後、玄皇帝は獅家の代表と和睦を果たした。

ときを同じくして、翔都で軟禁されていた竜蒼が宦官によつて解放され、芳士宮内の虎家派を一掃した。獅皇后が陥れられたという証拠も見つかつて彼女の復権が施された。

切り札だつた先帝青の血筋の件は、虎家にとつて諸刃の剣となつていた。

彼らはすべて承知の上で竜玄を即位させたのだから。

竜蒼と竜玄を罪に問うのなら、自分たちも問われなくてはならぬい。

虎家は状況を受け入れた。自分たちの権利と財産を守るためにはそうするしかない。

竜玄は最初の言葉通り退位した。

彼は即位した竜蒼に大將軍の位を賜り、和睦の証として獅家の娘を娶つた。

異母兄弟たちの間には約束があつたらしい。

それは事件を機に作られたものではなく、虎家の台頭によつて話し合われ、先帝の病を受けて練られたものだつたようだ。

鈴花は蒼皇帝の皇后となつた。

流される花に逆らう意思はない。

そして三年の月日が流れた。

鈴花は身籠らなかつた。

獅家出身の母を持つ竜蒼と天竜の姫である鈴姫が結ばれて子が出来れば、だれにも文句のつけようがない跡取りだつたのだけれど、こればかりはどうしようもない。

後宮を廃止して鈴花ひとりを溺愛していた竜蒼も、皇后本人に望まれては后妃を迎えないわけにはいかなかつた。復活した後宮に与えられた家で、鈴花は宦官から皇帝と后妃が結ばれたという報告を

受けて胸を撫で下ろした。

いま鈴花を補佐してくれている重富は仮面をかぶつていない。

幽海はどこかへ行つてしまつたのだといつ。

彼だけではない。

竜玄の即位時の混乱や竜蒼救出後の騒動で多くのものが行方不明になつていた。

鹿夫人や虎夫人ももういない。

後富廢止の際に禄を与えられて解放された虎夫人は、両家の和睦の証として獅家に嫁いだという。先日 手紙をもらつた。相変わらず上から目線だが元気そうなので嬉しかつた。

鹿夫人のほうはどうなつたのかわからない。少なくとも鹿家には戻つていなかつた。

……無事でいてくれれば良いのに。

無事で、出来るならば幸せで。

ほかの后妃に対しても、鈴花はそう望んでいた。  
流されるしか出来ない花だから、いや、花だからこそ、美しく咲いていて欲しい。

後富という存在が正しく必要なものかどうかはわからない。

けれど市井において女の仕事が制限される時代に、さまざま役割を担うことが出来る場所があるというのも悪いことではない。鈴花も皇后として政治に関わることで、天領の姫としての能力を持たない自分を受け入れられるようになつた。

皇帝の寵愛を受けられなくとも、後富にいるということがだれかの誇りになればいい。

そう思つ。

そう思えば いつかこの胸の痛みも消え去るのだろうか。

すべてを納得していたはずなのに、その夜、鈴花は泣きながら眠りに就いた。

後悔していたのは、竜蒼に后妃を娶わせたことではない。

……今日の朝議は休ませてもらおうかしら。

翌朝、ぼんやりと鈴花は思つた。竜蒼と顔を合わせたくない。

「…、皇后陛下！　皇后陛下あつ！」

あわてた様子で侍女が部屋に飛び込んでくる。

「どうしたのです。朝から騒々しいですよ」

「大変です。皇帝陛下が、皇帝陛下が！」

鈴花は家を飛び出した。

後宮が赤く染まつている。建物が燃えているのだ。召使いや宦官たちが叫び声を上げていた。表の芳土宮のほうも燃えているようだ。輿を用意させている時間が惜しい。

駆け出しかけた鈴花の前に馬が立ちふさがつた。獅皇后のころは羽律苑で乗馬を楽しむものも多かつたけれど、いまはまだ后妃も少ない。見回りの宦官だらうか。

顔を上げ、騎乗の主を見て息を飲む。

「竜玄様……後宮は皇帝以外の男子は禁制ですよ？」

三年前よりも大人びた顔に微笑が浮かぶ。もう少年ではない。

獅家から娶つた妻に子どもも出来、竜玄は一児の父となつていた。立派な大人だ。

鈴花は彼から視線を外した。

皇后として朝議で会話することもあるのに、なぜだらう。妙に気恥ずかしかつた。

いや、いまはそんなことを考えている場合ではない。

大将軍である竜玄が後宮に入つてくるとはよほどのことだ。反乱でも起きたのだろうか。

……ありえない。

思つてすぐに否定する。跡取りがいないこと以外では竜蒼は完璧な皇帝だ。

もう飢えている民はいない。

骨州は風土に合つた作物の種を西域から輸入したことで、今までは国で一番豊かな土地となつた。その輸入には左州の虎家が関わつ

たため両家の絆も深くなっている。

異国からの侵略だろうか。

それもありえない。北には護山脈、東には落河、西には左州と骨州があり、南の尾州の向こうは砂漠だ。右州の翔都にまで攻め込まれる前に情報が来る。

「……鈴花殿……」

低く甘い竜玄の声に背筋が凍つた。

侍女に異常を報告してきたのはだれだ。

いま、足元に転がっている宦官だろうか。彼は血塗れで横たわっていた。腹が破れて臓腑が覗いている。その腹を破ったのはだれだ。宦官は肩にも傷を負っていた。

肩から背中へと後ろから斬りつけ、思わずふり返ったところを馬の蹄が襲つたのか。

竜玄が手にした剣は血で汚れている。彼が乗る馬の蹄も血で汚れていた。

「どう、して……？」

鈴花は竜玄を見上げながら、建物のほうへと後退した。

ふたつ年下の義弟が笑う。

さつきの微笑とは違う子どもじみた表情だ。無邪気で、それゆえに狂気を帶びている。

「約束したのです」

「約束？」

「ふたりで、ずっと鈴花殿をお守りすると。そして、もし蒼兄上が鈴花殿を裏切ったときは、俺が鈴花殿をいただくと。だから

いただきに参りましたと片腕を伸ばし、竜玄は鈴花を馬上に抱き上げた。

太い腕には相変わらず包帯が巻かれている。彼の妻はその下を知つているのだろうか。

膝の上に乗せられ、男の匂いに包まれる。

竜蒼の匂いとは違う。

西域から輸入する香辛料の匂いだろうか。刺激的な香りが鼻をくすぐる。

相変わらず竜玄は体温が高い。

鈴花は微笑んだ。

「竜玄様」

「はい、鈴花殿」

「そちらの剣は、以前わたしたちが眠るときに間にあつたものですね。懐かしいので、よく見せていただけませんか？」

「いいですよ。でも鈴花殿。あなたの力では俺を殺すことなど出来ませんよ」

柄を持ったまま、竜玄は血に濡れた刃を鈴花に向けた。花には流れを止める力などない。

だけど。

鈴花は竜玄から剣を奪う気などなかつた。彼が持ったままの刃に体を落とす。

喉が熱い。竜玄の叫び声が、どこか遠くから聞こえてくるように感じじる。

後悔しているのはあの夜のこと。

口付けになど縛られるのではなかつた。

もう自分でも気づいていたはずだ。

彼が好きだ。

尻軽な女だと罵られてもいいから、自分にだけは嘘をつかなければ良かつた。

青い瞳に捕らわれて、花は散つた。

終

身も心も疲れているのだな。う。

竜玄は一度眠ると朝まで目覚めない。

いっぽう日中寝てばかりの鈴花は、夜は起きていることが多かつた。おそらく生活が夜型になってしまっているのだ。今日は骨州の民に食事を配るという役目を果たしたので、疲れて夜眠れるかと思つていたのだけれど、逆に頭が冴えて眠れないでいた。

皇帝と皇后の間には剣が置かれている。

巨大な金属の剣だ。

暗闇に座り、壁の細工から忍び込んだ月光に照らされた竜玄の寝顔を見つめる。

あじけない少年の顔。毎日大変なせいか、眉間に皺が刻まれている。

皇帝になる前は將軍の位にあつたと聞いた。皇族のお飾り將軍ではなく、父とともに各地を回つて諂いを収めていた優秀な軍人だつたといつ。

情報源が虎家から来た侍女たちだといつことを差し引いても信憑性は高い。

輿の外にいた兵士たちも、鈴花には複雑な視線を投げかけてきたが、竜玄に向けるそれは信頼と愛情に満ちていた。部下に慕われているのだ。

じつと竜玄の寝顔を見ていたら、竜蒼の顔が浮かんできた。

印象が違すぎる所以考へたことがなかつたものの、ふたりとも口元がよく似ている。

唇が薄くて大きいのだ。父親似なのかも知れない。

……瞳は違う。

ほんやりと鈴花は思った。

そう、瞳は違う。色だけでなく、なにかが違う。

竜玄の瞳に見つめられると鈴花は身動き出来なくなる。彼から田  
が離せなくなる。

「……竜玄様……」

言葉が勝手にこぼれ出た。

自分で自分が情けない。竜蒼と約束をしておきながら、なんて尻  
軽な女なのだろう。

それでも心に嘘はつけなかつた。考えれば十一年前からそうだつ  
たのかもしれない。竜蒼を待たせていても、竜玄の泣き声に立ち止  
まらずにはいられなかつた。

やすらかな寝息を漏らす顔を見つめる。

溜息をついてつぶやいた。

「今夜は掛け布を蹴飛ばさないのかしら？」

彼は寝相が悪い。

鈴花に危害を加えたことはないけれど、掛け布は蹴飛ばす枕は  
放り投げるわで、起きると毎朝強盗に押し入られたような部屋にな  
つていて。

期待して待つてみたが、残念なことに今夜の彼はお行儀が良かつ  
た。

人形のように直立した格好で眠つている。

「まあ良いわ。明日もあるのですもの」

竜玄に想いを打ち明ける気はない。

青い瞳の熱を自分への好意だと感じているのは自惚れだろう。た  
ぶん本当は逆。鈴花が彼に恋をしたから、そういう風に感じている  
のだ。

なんて情けない。けれどどうしようもない。

花は流れに逆らえない。風に吹かれ、水に流されて恋に落ちる。

出来るのはきっと、自分の想いを認めるか認めないか選ぶことだ  
けだ。

自分の心を自由に出来ないのだから、相手の心だって自由に出来  
るはずがない。

心の中で囁く。

……竜玄様が好き、大好き。

彼が涙するときは濡れた頬を拭つてあげたい。彼が傷ついていたならば、自分の命と引き換えにしても癒したい。眠つた彼が暴れていたら

「何度掛け布を蹴り飛ばしても、絶対にかけ直してあげますね」「寝顔が少し引きつったように見えたのは気のせいだろうか。

狸寝入りされていたとしても、聞かれて困ることは言つていない。

鈴花は横臥して、剣の向こうの横顔を見つめた。

もしも眠りに就いたなら彼の夢を見られますように。

それが鈴花にとつて、いま一番の願いだつた。

州都の立に近づくと、飢えた村は少なくなつていった。

獅家の援助が行き届いているのだ。民想いで知られる獅公にも、自分に近いところからしか守れないのだろう。自体は間違つたことではない。

獅家の分家にあたる男が統治している街の門を開いたのも、生きていいくためには当然のことだつたのだろう。少なくともこれで、民が命を失うことはなくなつた。

「獅黄です。字は美牙。皇后陛下のお噂はよく聞いておりますよ」歓迎の宴席で、街の太守は言った。

鈴花は扇を口元に当てて首を傾げた。

隣に座つた竜玄が低い声で囁く。

「鈴花殿、美牙殿は兄上……」

彼は口籠り、辺りを見回した。

酒色に溺れているようでいて、同行している虎家人間は皇帝と太守から目を離してはいない。街の受け渡しのときから、彼らは美牙を疑つていた。恭順など嘘に決まつてはいるのだから、開いた門から攻撃しろと言い続けていたのだ。

当然宴席に出席するのも嫌がつていた。竜玄の気持ちを変えられ

ないことに気づいて、鎧だけは脱がないと彼に誓わせる」とで渋々譲歩した。

と、聞いている。竜玄が笑いながら教えてくれたのだ。

鈴花は複雑な気分だった。

虎家の心配はわかる。しかし彼らの言動は皇帝に対するものとは思えない。

……どこか竜玄様をないがしろにしている気がする。

竜姓がいつわりだからか。どれくらいの人間がそれを知っているのだろう。竜玄に尊敬の視線を向けている兵士たちも、真実を知つたら態度が変わってしまうのだろうか。

虎家の視線を無視し、竜玄は言葉を続けた。

「蒼の幼なじみでいらっしゃるのです。彼から、あなたのことを見ていたということでしょう」

鈴花は胸が痛んだ。

自分の気持ちに嘘はつかないで、しようと決意したが、もうひん竜玄に伝える気はない。

鈴花と竜蒼が結ばれることを望む彼が、異母兄の話をするのは当然だ。

わかつているのに切なかつた。

……情けない。間違つてているのは自分なのに、竜蒼様のことを忘れたいと思うなんて。

「んん？ 蒼のことを話していますか？」

猫のようになり元を綻ばせた美牙に、虎家が緊張を走らせる。竜玄は顔色を曇らせた。

「いえ、その……申し訳ありません。あなたの前で内緒話などして、美牙はくすくすと笑みをこぼした。

「とんでもない。殺されなかつただけで充分です。こんなところで反逆者の名前を出した私が問題ですね。虎家の方々にも失礼いたしました」

いますぐ首を切り落とされても、その顔は笑みを浮かべたままで

はないだろうか。

そんな不思議な雰囲気の男だ。

親戚だと聞いたせいか、日元の辺りがビビりなく竜蒼と似ているような気もした。

「ただ、もし私が皇后陛下のことを彼から聞いたのだと思つておられるのなら、それは違いますと申し上げたかっただけです。私は骨州の民に聞いたのです。飢えたひとびとに食べものをお与えになられたという、天女の化身のような皇后陛下のことを」

鈴花はうな垂れ、首を横に振った。

「あれは皇帝陛下のお考えです。わたしはただ、ご命令に従つただけ……」

言つてから後悔する。これでは嫌々行なつたようではないか。

竜玄の気分を害してしまったかも知れない。

嫌われたくないと望むのも図々しい身の上だが、それと彼を傷つけることは別問題だ。

「もちろん偉大なる皇帝陛下のお考えでしょ。でもだからといって皇后陛下の行いが幻というわけではないでしょ。もちろん皇帝陛下は色男です。それでも民としては、筋骨隆々とした男性よりも天女のような女性に給仕されたいのですよ」

言いながら、美牙は竜玄の杯に酒を注ぎ始めた。

竜玄は微笑んで、彼の言葉に首肯する。

「その通りです、美牙殿。俺が民でもそう思います。飢え死に寸前なら尚のこと、最後に見るのは鈴花殿がいい」

すっと、青い瞳が鈴花を見つめる。

熱い視線に射られて、時間が止まる。

鈴花は扇を握り締めて自分に言い聞かせた。

たぶんこれは演技。虎家の人間に皇帝と皇后の仲が良いことを見せ付けるためのもの。

勘違いしてはいけない。

竜玄に気持ちを知られているからではないし、彼に愛されている

からでもない。

それでも。いつわりでも。見つめ合っているだけで息が止まりそうなほど幸せだった。

永遠のような一瞬が終わる。

竜玄は美牙に酒を注がれた杯の香りを確かめた。

「……良い酒ですね」

虎家の咎めるような視線を鋭い眼光で打ち消し、杯に唇を当てる。見惚れていた鈴花は、ハツとして彼の手を取つた。

「鈴花殿？」

「竜玄様、お酒だなんて……」

精悍な顔で、竜玄は子どもみたいに唇を尖らせた。

「確かに俺は鈴花様より年下ですが子どもではありません。大人です、皇帝なのです」

「それはそうかもしません。でも……」

「どうしても心配なのだ。体は大きいが、彼はまだ成長期だ。

黒髪の男が竜玄から杯を奪つた。

「申しわけございません、美牙殿。玄皇帝陛下は、まだ十七歳でらせられますので」

そう言って飲み干す。

いつも影のようになつて竜玄に付き従つてゐる男だ。虎家の間ではない。

落ち着いた雰囲気の美丈夫で、年ごろは先帝と同じくらいか。体格こそ劣るもの、年若い皇帝を嗜める姿は、家臣といつより父親のようになつてゐた。

「……狼黒殿。字は鋭爪殿とおっしゃつたかしら？」

一番信頼出来る部下なのだと、竜玄に紹介してもらつていた。

「鋭爪、美牙殿に失礼だろ？」

「構いませんよ。忠義の武将、狼氏のことは知っています。私をお疑いならば、酒杯を奪う前に殺されていたでしょう。これは私の失態でした。お若い皇帝陛下と皇后陛下にはお茶をご用意させていた

だきましょ「」

美牙はほほ笑み、召使いに茶の用意を命じた。

宴席には太守以外にも、この街で重要な地位にある人間が出席している。

虎家はもちろん、ほかの兵士たちも彼らから田を逸らしてはいなが、銳爪が美牙の杯を口にしても異常がなかつたことで、少しばかりの雰囲気が安らいだようだ。

若い皇帝の飲酒を嗜める振りをして毒見をしたのかもしれない。銳爪が竜玄から離れないということも、虎家に出来られた宴席出席の条件のひとつだったと聞いていい。

拗ねた顔をしながらも、竜玄は酒杯を諦め、用意された茶を飲み始めた。

「皇后陛下」

「あ、はい。なんでしょう？」

美牙に声を掛けられ、鈴花はあわてて竜玄から視線を外した。ずっと見つめ続けているのも失礼になるだろう。

本当はずっと、瞼を閉じても浮かび上がるくらいずっと、視界に刻まれて消えなくなるくらいずっと、見つめていたかった。

「皇后陛下のお噂は骨州の民に聞いたのですけど、皇帝陛下のお噂は蒼に聞いたのです」

虎家の人間に緊張が走る。美牙の部下たちも蒼田になる。宴席の空気が一気に冷えた。

……ああ。

なんとなく、鈴花は納得した。

美牙は竜蒼に似ている。見かけだけではない。

わざと毒のある言葉を口にして、相手の反応を見よつとするところが似ているのだ。いや竜蒼よりひどい。さつと田の前に虎の尾があつたら、踏まずにいられない性格なのだ。

「美牙殿！」

竜玄の制止にも笑うばかり。

「失礼いたしました。ですが悪い話ではないのですよ。彼は皇帝陛下の即位前から言つていました。竜玄陛下には求心力がある。自分よりもはるかに皇帝陛下に相応しい、と」

ただのおべんぢやらだらうか。美牙の場合それだけではない気がした。

竜蒼を思い出させることで、竜玄を傷つけたりしないと良いのだが。

鈴花は竜玄の様子を窺つた。

「ほら、そのよう」

「はい？」

「皇后陛下の視線を常に独占なさつてゐる皇帝陛下には、本当に求心力がおありだと思つただけなのでござりますよ」

ふつと場の雰囲気が和らいだ。

虎家の人間の表情は複雑そうだけれど、兵士たちはにこやかな笑みを浮かべている。

鈴花はうつむいた。うつむきながらも竜玄に視線を送る。彼は子どものように無邪気な顔で笑つていた。

「なんだかフラフラします」

美牙に用意された部屋で、竜玄はふたり分の寝具の真ん中に大の字に寝転がつた。

「酒気に当たつてしまつたのですよ」

鈴花は彼の服を脱がそうと悪戦苦闘していた。

鎧の脱がしがわからぬ。それに竜玄は大き過ぎる。

手も足も筋肉が盛り上がりつて重くてたまらない。普段よりも体温が高く、硬い体が妙にくにやくにやと動いている。

酒席にいただけでこうなのだから、本当に飲ませなくて良かつた。

「……ひとりでは無理ですね。だれかひとを……」

部屋の外には護衛の兵士たちがいる。

「嫌です」

竜玄はむくりと起き上がつた。

「ほかのだれかを呼ぶくらいなら、自分で脱ぎます」  
ダラダラしていたのは演技だったのかと思つくらい、てきぱきと脱衣する。

……あ！

彼は腕に巻いていた布までほどいてしまつた。  
気になつていた場所には痛々しい刀傷があつた。

状態からして十二年前の傷ではない。自分の治療が間違つていたとしても、ここまで新しい傷のまま残つてゐるはずがなかつた。同じ場所なのは偶然だつたのか。

「鈴花殿」

「は、はい？」

ふたたび横たわり、竜玄は満面の笑みで言つ。

「むかし、兄上と約束したのです。ふたりで、ずっと鈴花殿をお守りすると。でも兄上はこうもおっしゃつていました。だれを夫にするのかは、俺たちではなく鈴花殿ご本人がお決めになると」

胸がざわめいた。彼はなにを言おうとしているのだらう。

もしかして。いや。そんな都合の良いことがあるわけがない。

低い声が吐息になつて、甘く耳朵を打つ。

「……優しくしてください」

「え？」

「どなたの奥方におなりになつても、俺に優しくしてください」

「竜玄様……」

「この前、俺が寝た振りをしていたときに、おっしゃつてくれたではないですか。何度掛け布を蹴飛ばしても絶対にかけ直してくださいると」

「は、はい。確かに言いました」

聞いていたのだ。聞かれても困らないだなんて嘘だつた。顔から火が吹き出る。

「そんな風に、ずっとずっと優しくしてください。俺に優しくして

くださるのは、鈴花殿だけなのですから

竜蒼はどうだつたのかと聞きかけて、鈴花は言葉を飲み込んだ。自分でもズルいと思うけれど、彼のことを思い出させたくなかつた。

「……優しくします」

鈴花は竜玄に掛け布をかけた。

「ずっとずっと優しくします。竜玄様はわたしの、わたしの……ごくりと唾を飲み込み、言葉を選ぶ。

「大切な方ですから」

にやけて力の抜けた竜玄の顔に手を伸ばす。

今夜ふたりの間に剣はない。

頬に触れた鈴花の指を竜玄がつかむ。

「俺以外の方の後宮に入られたとしても、俺は鈴花殿に優しくしてもらいたいに行きます」

「後宮は男子禁制ですよ？」

「宦官になります」

鈴花は微笑んだ。

竜玄の考え方は真つ直ぐだ。あまり損得を考えないのでどう。周りの人間の顔色を窺い、変に大人びて見えることもあるけれど、彼の心は子どものままなのかもしれない。

「ダメです、宦官なんて。施術が失敗したら死ぬこともあるのですよ？」

先帝の後宮にいたときに、宦官のことも少しは聞いていた。

「それでもいいです。鈴花殿のお側にいるためなら、死ぬのも怖くない。あのときだつてずっと竜宮にいたかった。どこも花だらけで、小さな天女が俺の……」

ふつと眠りに落ち、竜玄はいびきをかき始めた。

「……真ん中で寝られてしまったのだから、仕方がないわ。心の中でだれかに言い訳して、鈴花は彼に寄り添つた。

その夜は普通に眠りにつくことが出来た。きっと竜玄の温もりの

おかげだね。

虎花乱舞（後書き）

『狼の影』につづく

骨州の都、立は近い。もういくつもの街と町口を過ぎてきた。争いは起こらなかつた。太守たちはみんな、門戸を開いて皇帝を迎えた。

不満そうだつた虎家のの人間も、獅家討伐後はそれぞれの都市を配分されるという約束をもらい、自分たちの私兵を見張りとして残すことと妥協していた。

皇帝軍とともに進む輿には窓がついている。

鈴花はそつと外を窺つた。

前を進んでいた竜玄が気つき、こちらに蹄を向けようとする。べつに用事があつたわけではなかつたので、鈴花は焦つた。

彼の隣にいた鋭爪がそれを止める。竜玄の周囲は虎家のの人間で占められている。皇帝と同じ蒲公英色の髪をした人間の中、黒髪の男はひとりだけ浮いていた。

彼はいつも竜玄の横に影のように控えている。

子どものように頬を膨らませてなにやら反論した後、竜玄は鈴花に手を振つた。

鈴花も彼に手を振り返す。それだけのことが、なんだか嬉しかつた。

侍女たちが微笑んだ。

「皇后陛下と皇帝陛下は本当に仲がよろしいのですね」

鈴花も笑みを浮かべた。不自然な顔になつてはいなかつた。いつわりの夫婦だと気づかれてないと良いのだけれど。

「仲が良いといえば、皇帝陛下と狼殿も仲良しでいらっしゃいますのね」

「はい。皇帝陛下が將軍であらせられたころからの忠臣でいらっしゃいますから」

「そうなの。天領にいたので詳しく知らないのですが、狼殿はお強

いのですか？」

本来なら皇帝の周辺は虎家で固めたいだろうに、それでも一緒にいることを許すほどなのだ。護衛として高い能力を持つに違いない。

侍女のひとりが弾んだ声を上げた。

「ええ、それはもう！ 今上帝のことを何度もお救いになられていますわ」

べつの侍女が相槌を打つ。銳爪はなかなか人気があるらしい。

……雰囲気があつて素敵ですものね。

竜玄が太陽だとしたら、銳爪は月だろうか。いつもはひつそりと皇帝の影に隠れているけれど、ときおりふつとその存在を明らかにする。

多少陰気な風ではあるが、大人の男の滌さに惹かれる娘もいるだろう。

鈴花はどちらかといえど同年代が好みなのだと思う。

「銳爪様はお強い上に面倒見もよろしくてらっしゃるので、兵士たちに大層人気がありますの。その銳爪様に支持されているからこそ、今上帝も兵士たちに慕われていらっしゃるのですわ」

周囲の侍女たちに咎めるような視線を向けられて、浮かれていた侍女が青くなつた。

「あ、いえ……も、もちろん皇帝陛下は、銳爪様なしでも慕われていらっしゃると思います」

鈴花は苦笑した。

いくら国の最高権力者であるつとも、竜玄はまだ若い。他者の力が必要なときもある。

「大丈夫、不敬だとは思いませんわ。そんな方を従えている皇帝陛下の素晴らしさがよくわかりますもの」

侍女は安堵の息を吐き、満面の笑みを浮かべた。

「そうなのです。そもそも銳爪様は先帝陛下の即位直後に、政変による混乱に乗じて攻め込もうとした西方の蛮族から先帝陛下をお庇いになられて大怪我をなさつたばかりか、美貌で知られた……あ」

夢中になつて話していた侍女を、べつの侍女が肘でつついた。

「とても忠義の深い方でらつしゃるのね」

鈴花の言葉に、侍女は歯切れ悪く答えた。

「え、ええ……」

不審に思つて見回しても、みんな鈴花から視線を逸らす。

銳爪には護衛として優れている以上になにかがありそうだ。

それも気になるが、鈴花は竜玄が何度も彼に救われたという話が気になつていた。

平和な天領でのん気に暮らしていた鈴花は、竜天国の内外がそんなにも乱れていたとは知らなかつた。先帝が芳士富に寄りつかなかつたのは、政治が苦手だったからだけではなかつたのかもしない。獅家との戦いはどうなるのだろう。

竜玄は危険に陥らないだろうか。銳爪が救うといつても絶対ではなかろう。

考えただけで心臓が潰れそつた。

竜玄の腕の傷、あれは将軍として働いているときに出来たものだつたに違ひない。

のん気に十二年前のものかもしれないなどと考えていた、浅薄な自分が嫌になる。

ほかにも傷があるのだろうか。

戦場では満足な手当てを受けられないこともある。いまならともかく、以前の竜玄はただの皇子に過ぎなかつた。なにかあつても皇帝が優先されるのは当然だ。

考えているうちに心臓が早鐘を打ち出した。

後遺症が残つていたりはしないだろうか。

もしかして、寝相が悪いのは戦場で負つた心の傷のせい？  
そんなことまで考えてしまう。

動悸が激しい。なんだか耳まで痛くなる。

「……皇后陛下？」

「え、あ、はい！」

侍女に声をかけられて飛び上がる。ひとつで百面相をしていたようだ。

悩んでいても仕方がない。

とりあえず鈴花は、今夜竜玄に薬湯を淹れてあげることにした。

……武術でも学んでいれば良かつた。ううん、ちゃんと天領の姫としての力があれば。

戦場でも彼の隣に立ち、守ることが出来ただろう。

ふつと氣づく。竜玄に信頼出来る相手がいたことを喜びながら、鈴花はそれが自分ではないことに、どうやら嫉妬しているらしい。

「はい、鈴花殿。お土産です」

その夜、輿の寝室に戻ってきた竜玄はそう言つて、小さな野の花を渡してくれた。

侍女たちは下がらせていい。部屋の中にはふたりきりだ。

「可愛い。ありがとうございます、竜玄様」

彼は照れくさそうに微笑む。

「竜宮は花がいっぱいだったでしょう、花のない暮らしへ退屈されているのではないかと思いまして」

鈴花はうなずいた。

「とても嬉しいです」

水を入れた茶碗に花を飾つたとすると、青い瞳が丸くなつた。

「違いますよ」

花を奪い、竜玄は簪のようになに鈴花の髪に飾る。

「こちらです。このほうが花だって喜びます。……俺も

「竜玄様も？」

「はい。お美しい鈴花殿が見られて嬉しいです。あ、でもー、

少年は褐色の肌を赤く染め、鈴花から視線を逸らした。

「鈴花殿は普段からお美しいです」

「……ありがとうございます」

鈴花は顔を伏せた。

嬉しいけれど、心のどこかが冷めている。

優しい言葉をかけてはくれるもの、彼の頭には鈴花と結ばれる未来はない。竜蒼以外との選択肢は与えてくれたが、竜玄という選択肢は与えられていなかった。

こちらの気持ちを察したのだろう。竜玄の顔色が曇る。

鈴花はあわてて笑みを浮かべた。

「ま、毎日お疲れでしょう？　わたし、薬湯を淹れましたの。お飲みになりますん？」

竜玄の表情が歪んだ。

「薬湯つて……苦いのでしょうか？」

「それは、まあ、お薬ですから」

大きな体を丸める。

「俺、苦いものは嫌いです」

鈴花は吹き出した。

「この前の宴で、止めるわたしに偉そうなことを言つて、お酒を飲もうとしていらっしゃったのはどなたでしたか？　子どもではないのでしょ、う、皇帝陛下？」

「でも……鈴花殿はあの夜、優しくしてくださると言つてくださったではないですか？」

唇を尖らせる皇帝に笑いを堪え、鈴花は薬湯に砂糖とヤギの乳を混ぜた。

「甘くしましたよ。これなら飲めますか？」

不審そうに茶碗の湯気を嗅いだ後、竜玄は目を閉じ薬湯を飲み干した。

太い首。じくりと喉が動く。青い瞳が見開かれた。

「本当に甘い。美味しいです、鈴花殿」

「田の前でお砂糖を入れたじゃありませんか」

薬湯の甘さに浮かれていた少年の顔が、戦場を潜り抜けてきた男の顔に変わる。

澄んだ青い瞳に影が差す。

「油断は出来ません。入れる振りをして入れなかつたり、入れてない振りで入れたりするかもしれないじゃないですか」

鈴花の胸が、ちくんと痛んだ。

「……あ！……つと、えつと、その、鈴花殿にそういう真似をされるとは思つていませんよ。ただ、あの、習慣で……」

額に脂汗をかき、瞳を潤ませる皇帝を睨みつける。

「ええ。わたしの」となど信用してはいけません。優しいといふのは甘やかすということではありますからね。どんなに竜玄様に嫌がられても、必要とあれば苦いお薬を無理矢理飲ませて差し上げますわ」

「それは、あの……鈴花様」

「なんでしょう？」

べそをかいだ子どもの顔で竜玄が言つ。

「優しいだけじゃなくて甘やかしてください」

「ダメです」

「そこをなんとか」

「ダメなものはダメです」

「彼は唇を尖らせた。

「そんな意地悪ばかり言つ鈴花殿には「うつです！」

大きな体がのしかかつてくる。押し倒され、服の上から体をくすぐられた。

「えい、えい！」

「きやあ、もう、竜玄様つたら！ うふふ、くすぐつたいですわ」  
優しくすると約束してから、彼は少し子どもに戻つたようだつた。  
邪氣のない笑顔で鈴花を責め立てる。

「わたしも仕返します！ エー！」

竜玄に触れて、服の上からでもわかる逞しい体に気づき、鈴花は手を止めた。

ふたりは子どもではない。

十二年前、七歳と五歳の子どもだつたときだつて、こんな遊びは

しなかつた。

「どうしたのです、鈴花殿。俺の勝ちですか？」

見下ろしてくる彼に触れられている場所が熱い。鈴花は視線を逸らした。

「え、ええ。竜玄様の勝ちです。だから甘やかして差し上げます」震える声に気づかなかつたのか、竜玄はわいと叫んで鈴花の胸に顔を落としてきた。

「竜玄様？」

「……頭、撫でてください……」

言われた通りに頭を撫でる。蒲公英色の黄色い髪は、想像していたよりも硬い。

「嬉しいなあ。俺、いつも甘やかされたことないんです」

「そうなんですか？」

「はい。俺の母上は……俺のこと嫌いだつたから。本当はべつに好きな男がいたのに、虎家の犠牲にされたんです」

「そう……」

「結婚してすぐに相手の男が蛮族との戦いに駆り出されて、半年後に戻ってきたと思ったら大怪我してて、その夫が大怪我してまで守つた相手に伽を要求されて……」

鈴花は竜玄の頭を撫でていた手を止めた。

極最近どこかで聞いた話と重なる気がしたのだ。

大きな手が鈴花の手をつかむ。

「止めちゃ嫌です。もっと撫でてください。……前、俺に優しくしてくださるのは鈴花殿だけだと言つたとき、不思議そうな顔をなさいましたよね？」

「え、ええ……」

「蒼兄上はどうなのかとお思いになられたのでしょうか？　はい、確かに蒼兄上はお優しかつたです。でもそれは親切という形の優しさで、こんな風に甘やかしてはくださいませんでした。まあ当然ですね。想像するだけで気持ち悪いじゃないです。俺が蒼兄上に抱

きついて、頭を撫でてもらつていい姿など

それはそうかもしない。

「でも秘密にしましょうね、鈴花殿。蒼兄上は嫉妬深い。俺がこうして鈴花殿に甘えていたなんて知つたら、きっと殺されてしまいます」

鈴花は答えなかつた。なんと答えればいいのかわからなかつたのだ。

竜蒼と過ごした時間よりも竜玄と過ごした時間のほうが、もう長い。

気持ちは決まつていてる。

伝えられなくてもえることは出来ない。

竜玄が顔を上げた。褐色の肌、黄色い髪、真っ青な瞳。以前薄い唇が似ていると思つたけれど、いまは竜蒼の顔自体が思い出せない。「だけどもし、鈴花殿が蒼兄上以外の方をお選びになるのだとしたら、俺が兄上を殺してあげます。だから安心してくださいね」

彼は子どものように誇らしげな口調で、狂氣を含んだ言葉を紡ぐ。蒲公英頭に腕を伸ばす。

「そんなことする必要ありませんよ」

硬い髪に指を絡める。

「……蒼兄上をお選びになるから大丈夫といつことですか？」

竜玄は、どうしてこんなに泣きそうな顔をするのだろうか。しばらく無言で彼を見つめ、鈴花は口を開いた。

心は変わる。自分自身でも思ひもしない変化を遂げる。だけど。

「なにがある」と、心だけは自由ですもの

花は流れ落ちる先を選べない。

ひとは恋する相手を選べない。

出来るのはただ、自分の気持ちを認めるか認めないかだけ。両想

いになるもならないも思い通りにはならないものだ。

「そうですね」

竜玄の頭が鈴花の胸に落ちる。

「……なにがあらうとも心だけは自由です……」

鈴花は彼の頭を撫でながら、尋ねてみた。

「ところで、獅家との戦いは避けられないのでしょうか？」  
「突然ですね」

竜玄は体を起こし、いつもの密談の姿勢になる。

鈴花を膝の上に抱き、耳元に口を寄せたのだ。吐息が熱い。

「……大丈夫です。獅家とは和睦の密約を結んでいます。もちろん虎家には内緒ですが」

信頼出来る間者が、彼と獅公をつないでくれているのだとこう。

安堵の息を吐き、鈴花は竜玄の広い胸に顔を埋めた。

彼が笑う。

「今度は鈴花殿が甘える番ですか？」

「いいえ。そうではありません。ただ……竜玄様が戦いで傷つくようなことがなくて、良かつたと思つただけです」

「俺が傷ついたら嫌なんですか？」

「当たり前でしょう！ 大切な方が傷ついたら、嫌です」

「……ごめんなさい」

「竜玄様？」

「俺はたぶん、蒼兄上よりも父上に似てる。戦うことが好きなんです。だから獅家との和睦が成つても傷つくことはあるでしょう。先に謝つておきます」

「ダメです。そんなことなさらないでください。先に謝られたって許しません」

くすくすと楽しそうな笑い声が耳朵を打つた。

「そう言わいで俺が怪我したら薬をつけてください、むかしみたいに。薬湯を淹れてくださいたのでもいいですよ？」

「……うんと苦いのにします」

「甘やかしてくださるとおっしゃったのに…」

「戦つて傷つくるを許した時点で、甘やかしは終了です」

ちえつと舌打ちを漏らし、竜玄は鈴花の髪に手をやつた。ふざけている間にズレてしまつたお土産の花を手に取り、飾り直してくれる。

……この時間が、いつまでも続くといいのに。

鈴花は瞼を降ろした。

竜玄が言つた通り、獅家との和睦は成つた。

骨州の都、立は大きく門戸を開いて皇帝軍を迎えたため、小競り合いすら発生しなかつたのだ。

竜玄皇帝は軍を掌握していた。武将も一般の兵士も彼を慕つていた。

自由になる私兵たちをこれまでの街に置いてきたこともあり、虎家には逆らうすべがなかつた。竜姓の秘密は諸刃の剣だ。脅しのうちは力を持つが、明かしてしまえば自分たちにも被害が及ぶ。なにせ知りながら竜玄を即位させたのだ。

虎家の人間はバカではなかつた。

そして、皇帝軍が帰路を辿り出して半月が過ぎた。

翔の都に着いたときなにが待つてゐるのか、鈴花は知らない。いまはただ、竜玄と過ごせる時間を堪能していた。

ふたりは日々おしゃべりに興じ、子どものように遊んでいた。竜玄がどこからか拾つてきた草の種を転がしてぶつけたり、木の葉や枝を組み合わせて動物を作つてみたり、そんな児戯にすぎないことをしかしていなかつたけれど、鈴花は楽しかつた。

くすぐり合いは、あれ以来していない。

「鈴花殿」

「竜玄様！」

突然部屋に入つてきた竜玄を、鈴花は睨みつけた。

日は高い。本当なら皇帝は軍を率いて馬上にあるべきだ。

「なにをされているのです。まだお仕事の時間でしょう？」

気を利かせた侍女たちが部屋を出て行く。

彼は笑った。

最近は昼間から鈴花と遊んでいることが多い。鈴花も最初は嬉しかったのだが

「もつと甘やかしてくださいよ。俺は獅家との和睦という大仕事をやり遂げたのです。しばらく遊んでもいいじゃないですか。」

「はい」

大きな握り拳の下に手を伸ばす。

褐色の太い指が開いて落ちてきた今日のお土産に、鈴花は叫んだ。

「きやあ」

鈴花が取り落とした黒い虫を、竜玄は困惑した顔で捕まえる。

「虫はお嫌いでしたか」

「ふ、普通、女の子はそうでしょう?」

「「オロギですよ? 確かにまだ季節ではありませんが、もう少ししたら綺麗な声で鳴いてくれるのに」

大きな体でしょぼんとうな垂れられると、罪悪感が湧いてくる。悪気があつたわけではないことはわかつっていた。

それでもあの細い足が自分の掌の上で蠢くことを考えると背筋が凍る。

鈴花は辺りを見回し、小さな壺を手に取った。侍女のだれかが花を生けようとしていたらしげに、これを使おう。

「い、ここに……」

不満そうな顔をしたものの、竜玄は「オロギを壺に入れた。布をかぶせて蓋にする。

「鈴花殿、野菜とお水もいりますよ」

「そ、そうですね」

荒い息を漏らす鈴花に、竜玄は吹き出した。

「そんなにお嫌いなんですか。いや、嫌いというより怖い?」

「よ、良いではないですか、べつに」

「ええ、構いませんよ。はい」

……憎たらしい。

鈴花は唇を尖らせた。

竜玄にはひとをからかって楽しむところがある。

とはいえそれは性格の悪さといつも、男の子らしさなのかも  
しない。

悪ガキのようにイタズラな笑みを浮かべる彼は腹立たしいけれど、  
嫌いではなかつた。

獅家との和睦が結ばれたこと、心にふざける余裕が出来てこの  
のなら良いのだが。

「……ありがとうございます。秋に歌つてくれるまで大切に育てま  
すね」

「秋になつたら捨てちゃうんですか？」

「捨てるのではなく逃がすのです。虫は恋人を呼ぶために歌うので  
すから」

ふつと、竜玄の顔に複雑そうな表情が浮かんだ。

「ああ、そうでしたね……」

「竜玄様？」

「いいえ、なんでもありません。それじゃあ今日はなにをしましょ  
う？　ふたりで竜でも作りますか？」

「なにもしません。竜玄様はお外にお戻りください」

「ええっ！　それはないですよ、鈴花殿」

「……竜玄様……」

ふざけていた竜玄は、眞面目な顔になつて見つめてきた。

「もう噂をご存知なのですね。まったく女性は油断なりませんね」  
皇帝軍が帰路を辿りだしてしばらくして、兵士たちの間に妙な噂  
が流れ始めた。

竜玄は先帝の子ではないというのだ。

彼の母親は人妻だつた。人妻でありながら皇帝と通じたような女  
なのだから、後宮に上がつた後も男出入りがあつたとしてもおかし  
くない。先帝の後宮は乱れていた。

あるいは最初から、元の夫との子供もを皇帝の子だと偽ったのもしれない。

そこには、なんの根拠もない。

流れ出したきつかけもわからない。

竜玄を慕う兵士たちが信じるはずなかつたが、最近の彼は軍務を抜け出してばかりだ。

鈴花と遊んでいるのならまだ良いほうで、意味もなく暴れだすことも珍しくない。

罪のない兵士を怒鳴りつけることもあつた。

竜玄の評判は徐々に落ち、同時に噂を語る声が大きくなつていく。

「……お願いです。皇帝としてのお役目を果たしてください」

彼は微笑む。青い瞳には感情が浮かんでいない。

糸の切れた操り人形のように見えた。

「俺の役目はもう終わりました」

最初から気持ちは変わつていないのである。

竜玄にとつて皇帝となるべき人間は竜蒼だけなのだ。

自分は慕われてはいけないと思つてゐるのかもしれない。しかし

竜蒼の時代が来たとして、大將軍に選ばれる予定の竜玄にも人望は必要なはずだ。

……なにを考えているの？

彼の気持ちを想像すると、嫌な発想ばかりが浮かんでくる。

鈴花は不安だつた。

皇帝軍に流布した噂の源として、銳爪が処刑されたのは数日後のことだ。

処刑は竜玄皇帝本人の手で行なわれた。

わけがわからない。

鈴花は戸惑つていた。

侍女たちの間にも動搖が走つてゐる。兵士たちなら、さらにだろ

う。

銳爪の死によって尊が消えることはなかつた。  
むしろ前よりも強く語られるよくなつた。

虎家は隠しているけれど竜玄の母は銳爪の妻だつた。竜玄は先帝の子どもではなく、銳爪の胤。だから彼は父を殺したのだ、と。鈴花にはわからない。

後宮にまで入つていたのに、先帝を見たことがなかつた。

先帝と銳爪、どちらが竜玄に似ているのかわからない。

ただ、記憶に残る竜玄と銳爪の姿にはいつも暖かい雰囲気があつた。

こんな終幕を迎えるとはとても信じられない。

本当の親子だつたとしたらなおのこと、銳爪は竜玄のためにそれを隠し通しただろう。

……もしかしたら。

これはなにかの計画の一部なのかもしれない。

銳爪の死後、竜玄は鈴花の前に顔を見せなくなつた。

夜も輿ではなく、馬上か外に張つた天幕の中で眠つている。

嫌な予感が胸をよぎる。

……もしかして竜玄様は、わたしが竜蒼様を選んだと確信して、自分を消してしまつおつもりなのでは？

鈴花が異母兄以外の人間を選んだなら、竜玄はきっと、そのだれかを結ばせるために竜蒼を始末してくれただろ。もちろんそれは鈴花の望むところではないが。

でも鈴花が竜蒼を選んだなら、彼にとつては自分の役目は終わりということなのかもしれない。

背筋が凍る。

鈴花は自分で自分を抱き締めた。

それなら。

それが事実だとしたら、どうしたら良いのだろう。

彼が好きだ。鈴花は竜玄が好きだつた。

彼の手が血に汚れていても、瞳に狂気が浮かんでもいても、大きな体で甘えん坊な年下の少年が好きだった。

たとえ気持ちを伝えることは出来ないとしても、受け入れてもらえないのだとしても、心でどう思つかは鈴花の自由だ。

……竜玄様に生きていて欲しい。

彼がなにを考えているのかはわからないけれど、それが忌まわしいことだと確信していた。そうでなければ鋭爪のよつな忠義の部下を殺すわけがない。

ずっと側についていたら、彼が愚かな行ないをするのを止めることが出来るだろうか。

あるいは天領の姫として薬を作り、なにが起こっても対処出来るよつにしておくべきか。

どちらにしろ鈴花は、落ちて流されるだけだった花は、流れに逆らうことを選んだ。

## 狼の影（後書き）

ずつと側にいる  
出来る)ことをする

『虎花落水』につづく  
『竜花虎帝』につづく

「……鈴花殿……」

耳元で不機嫌そうな声が呼びかけてくる。

「なんですか？」

鈴花はあえてにこやかに答えた。

都はもう近い。

鈴花は馬上の竜玄の膝にいる。逞しい腕が体を支えてくれていた。彼がなにを考えているのか知らないが、こつして側にいれば止めることが出来る。

「どうしたのですか？」

「竜玄様が輿に来てくださらないから、わたしのほうから参ったのです」

少年がうなじに溜息を落としてきた。

「……鈴花様。軍にいるのは男ばかりなのですよ。獅家との戦いで略奪をしたり欲望を満たしたり出来ると期待していたのが外れて、不満を持っている兵士ばかりです。そんな男たちの前にお姿をお見せになられるのは……」

「あら。以前わたしに骨州の民に食べものを配るようおっしゃったのは竜玄様ではございませんの。あのときもわたしは、兵士たちの視線に晒されておりましたよ」

「あのときとは事情が違います。いまは……」

「そう、いまは、兵士たちの視線は冷たい。」

皇帝と皇后の仲睦まじい姿に、竜天国の輝かしい未来を感じていられないようだ。

本当に狼氏、鋭爪は心から慕われていたらしい。

兵士たちにとつて竜玄は、もう信頼出来る皇帝ではなかつた。だれよりも忠実な部下でさえ、くだらない噂から身を守るために斬り捨てる、臆病な虎家の傀儡だつた。その人形が天女の力を持た

ない形ばかりの皇后とじやれていっても、怒りの炎に油を注ぐだけだ  
る。

けれど兵士たちの嫌悪と憎しみを感じれば感じるほど、鈴花は竜  
玄から離れることが出来なくなつていった。

胸によぎった嫌な予感は日々ふくらみ、皮膚はチリチリと騒いで  
危険を告げる。

……なにかが起きる。いつか、もうすぐ。

風が冷たい。西の空が夕暮れに染まり始めた。

竜玄が馬を止める。

「輿にお戻りください」

彼の言葉に唇を噛む。すべてが闇に包まれる夜こそ、側について守  
りたいのに。

竜玄は鈴花を抱いたまま、馬から降りた。

輿が止まり、迎えに来た侍女たちに引き渡される。

「お休みなさいませ」

挨拶をして輿に上がる瞬間、不意に鈴花は振り向いた。

軍が揺れている。いや、だれかが人込みをかき分けて走っている  
のだ。

「皇后陛下！」

侍女たちの制止を振りきり、竜玄へと走る。

馬から降りたままだつた彼に向けて走つてきた兵士の前に転がり  
込む。

腹が熱い。

「鈴花殿っ！」

竜玄の叫び声。

鈴花はとつさに腹を押さえた自分の手を見た。

赤い。血の色に染まっていた。刺されたのだ。  
すぐ側で空気の唸る音がした。

鈴花を刺した男の首が、竜玄の剣で刎ねられる。

じろりと地面に転がった頭は、まるで作り物のように見えた。

……バカなことをしてしまったわ。

鈴花が庇つたりしなくて、竜玄は自分の身は自分で守れたのか  
もしれない。

でも。

血に染まつていないほつの手を上げて、泣きそうな彼の頬に触れる。

でも仕方がない。わかっていてもきっと、鈴花は自分を止められなかつた。

だつて心配なのだ。心配で、大切で、愛しい

「ご無事で、ようございました……」

「なぜ！ 鈴花殿、なぜ！ 都から密偵が報告してきたのです。宦官たちが蒼兄上の解放に成功したと。あなたはただ、無事にお帰りになればよろしかつただけなのに。ここで死ぬのは俺だつたのに！」

最後の力を振り絞つて、鈴花は泣きながら覆いかぶさつてくる竜玄に口付けた。

あの日、あのとき、竜蒼と口付けさえしなければ、竜玄に素直な気持を伝えられたのだろうか。それともこんなにも彼を恋するようになつたのは、いけないことをしているといつ禁忌の想いに煽られたからだつたのだろうか。

……どちらでも、良いわ。

好きな相手に口付け出来た。

それだけが事実で、とても大切なこと。

「鈴花殿、まさか……まさか、俺を？」

自然に顔が微笑むのがわかつた。

「そんな、だつたら、だつたら俺はこんな、こんなこと……」

強い力で引き寄せられた。

抱き締められて、抱き締め返したいのにもう、鈴花の腕には力が入らない。

広く硬い胸、腹からあふれる血よりも熱い涙が頬を焼く。

「……耐えられなかつた。耐えられなかつたんです、俺は。鈴花殿

が蒼兄上と睦まじくしておられる姿を見ることに。だから鋭爪に相談して、こんなくだらない計画を……」

……ああ、間違えてしまつた。

竜玄の声を聞いていたら、さつきまでの幸福感が消えていった。ダメだ、これではダメだ。このままでは彼は自分の後を追つくる。

ほり、剣を持って、刃を自分の首に当てている。やめて、と口に出す力も残っていない。

鈴花の頬を伝わっていた竜玄の涙が、彼の血で覆われた。

虎花落水（後書き）

終

## 鈴花虎帝

もう何日竜玄と会つていらないのだろう。

鈴花は輿に閉じこもり、毎日薬を作っていた。

手に入る限りの材料を使い、天領で教わった薬を作り続けている。

それに意味があるのかどうかはわからない。

けれどこれが、鈴花に出来る唯一のことだ。

竜玄は相変わらず輿には来ない。

翔の都が近い。皇帝と皇后が戻つたとき、それに何が待つているのだろうか。

鈴花は顔を上げた。

「……だれか？」

輿の外が騒がしい。なにか起つたのだろうか。

薬の調合中は距離を置かせている侍女たちを呼ぶ。

「皇后陛下！」

「なにがあつたのですか？」

ざわめきが近づいてくる。

輿が止まり、揺れる。部屋の扉が押し開けられた。

竜玄だった。腹から血を流しながら微笑んでいる。

彼はよろよろと鈴花に歩み寄り、その場に倒れこんだ。

「竜玄様！」

皇帝を追つてきた側近が、彼が兵士に刺されたことを教えてくれた。

鋭爪に恩を持つ男で、竜玄の行ないが許せなかつたらしい。

竜玄を刺した後、男はすでに捕らえられていた。

鈴花は辺りを見回した。

なにが起つても良いように、薬をたくさん作ってきた。特別な力を持たない鈴花が出来ることはそれだけだった。血止めの薬、痛み止めの薬、滋養強壮の薬 でも。

鈴花は悟っていた。どんな薬ももう効きはしない。竜玄は急所を刺されている。

おまけに支えもなしに輿に上がり、血を垂らしながら歩いてきたのだ。

出血多量で意識を失つていながらのが不思議なくらいだ。

「ごめんなさい、鈴花殿。服を汚してしまいました」

「……かまいません」

「後……後少しだから、俺、俺のこと甘やかしてください。あ、でも安心してください。鈴花殿は大丈夫です。密偵から連絡があつたんです。宦官たちが蒼兄上を解放したと……だから、都に帰れば、ちゃんと……」

鈴花は彼の唇を塞いだ。

青い瞳が丸くなる。

もつと早くこうしておけば良かつた。

夫を失つて再婚する女だつている。初恋が実るとも限らない。誓いを立てた相手以外に心が移つたつてかまわないではないか。竜蒼に責められることは覚悟しよう。竜玄に軽蔑されたつてかまわない。

もう心だけでは收まりきらなかつた。気持ちが外にあふれ出る。

「竜玄様はバカです」

鈴花は竜玄の大きな手をつかんだ。

「……鈴花殿……」

掠れた声が胸を締め付ける。

「わたしは、わたしはあなたが好きです。だから許しません。死んではいけません」

もし本当に自分に天女の血が受け継がれているというのなら。

鈴花は心から願つた。

「わたしの命を竜玄様に！」

自分がうつすらと光を放つていて、鈴花はまだ気づいていなかつた。

天女を妻としたものが眞の竜。

天女の力に目覚めた鈴花に命を救われたことで、竜玄は本当の皇帝となつた。

都に戻つたふたりを前に竜蒼は臣下の礼をとつた。

もうだれも、本人でさえ、竜玄がいつわりの皇帝だとは思つていない。

鈴花は手を握り、開いた。

あのときどうやって天女の力を呼び起したのか、いまは思い出すことも出来ない。

「鈴花」

竜玄の声に顔を上げる。

嫌なわけではないのだけれど、呼び捨てにされるのはまだ慣れない。彼自身も同じようで、褐色の頬がほのかに赤く染まつっていた。

ここは後宮。天皇后に与えられた館の一室だ。

新しい後宮には、まだ鈴花以外の妃はいない。

鈴花が天女の力を示した以上、ほかの妃はもう入らないかもしない。

「竜玄様……」

「沈んだ顔ですね。どうしました？」

「……わたしがちゃんと、もっと早く竜玄様に気持ちをお伝えしていました、狼氏が亡くなられることはなかつたのかと思つて……」

鋭爪の処刑も、噂が流れたことも、竜蒼の治世を望む竜玄の計画の一部だつた。

ただ竜玄を刺した男は天女の力による皇帝の回復を祝う恩赦として、罪を免れていた。

彼は悲しげにうな垂れる。

「俺も後悔しています。でも……鋭爪はどちらにしろ、近いうちに死ぬつもりだつたのだと思う。亡くなつた奥方……母が、俺が成人

するまで見守つてくれと頼んだから、これまで生きてきたのだと言つていたから

悲しい話だ。

身分や立場、どうしようもない運命が思いのままに生きることを阻む。

ひとはだれも水に落ち、流れる花に過ぎないのかかもしれない。

それでも。

鈴花は、座つた竜玄に寄り添つた。

心を偽ることは出来ないのだろう。

間違つていても、愚かでも、だれかを想い愛する気持ちだけは変えようがない。

鈴花が竜玄を救つた力は天女のものではなく、流れを溯り天へと昇る竜のものだつたのかもしれない。

太い腕に添えた手を、大きな手が包んでくれた。

温かい。

「鈴花」

「はい？」

「明日の朝議で、蒼兄上のことぶん殴つてもいいですか？」

竜蒼は太師として竜玄を補佐してくれている。

太師は本来幼帝のときに立つ役職だが、三男で跡取りとしての教育を満足に受けていらない竜玄には必要な存在だつた。太師は補佐であるとともに教育係でもある。

「ど、どうしてです、いきなり」

「だつて、蒼兄上が鈴花に口付けをしたから、事がややこしくなつたんじゃないですか。大体女装して後宮に忍び込んだこと自体大罪です！」

鈴花はうろたえた。

「そ、それは……で、でもそんな、竜玄様に殴られたら、竜蒼様は

……」

弟のほうが体の大きな兄弟なのだ。

「皇后ともあらうものが臣下に尊称をつけるのはおかしいです。といふか、俺の気持ちよりも蒼兄上のほうが大切なんですか？」

「そういうわけでは……」

竜玄の顔色を窺つて、鈴花は頬をふくらませた。

青い瞳の奥にイタズラな光が煌いている。

冗談だ。鈴花をからかっているのだ。それはもちろん、多少は嫉妬もあるだろ？

「お好きになさいませ」

竜玄が目を剥いた。

「え？ い、いいんですか？ 蒼兄上はあれで性格が悪いんですよ？ 怒つて反乱を起こされたらどうします？ もしかして、本当はやつぱり兄上の皇后になりたいんですか？」

鈴花は彼に口付けた。

自分も竜玄も過ちを繰り返してきた。取り戻せないこともあるけれど、それでも精いっぱい生きていくしかない。

「……鈴花……」

「約束したでしょ？ わたしは竜玄様を甘やかします。だからお好きになさいませ」

「う、うん。じゃあ蒼兄上を殴るのはやめておきます」

「そうですか。ええ、それがよろしいでしょ？」

「あの……たまには俺から口付けしてもいいですか？」

鈴花は黙つて瞼を閉じた。

甘えん坊な皇帝の熱い唇が落ちてくる。

皇后のために用意された煌びやかな部屋の隅に置かれた壺の中で、コオロギが恋の調べを奏で出す。

花は竜となり、虎は皇帝となり、新しい物語が始まろうとしていた。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1573w/>

---

『竜皇帝の花嫁』

2011年10月7日01時09分発行